

# 絵のない絵本

BILLEDBOG UDEN BILLEDER

絵のない絵本

青空文庫



## 絵のない絵本

ふしぎなことです！ わたしは、なにかに深く心を動かされるときには、まるで両手と舌とが、わたしのからだにしばらくつけられているような気持ちになるのです。そしてそういうときには、心の中にいきいきと感じていることでも、それをそのまま絵にかくこともできなければ、言い表わすこともできないのです。しかし、それでもわたしは絵かきです。わたしの眼<sup>め</sup>が、わたし自身にそう言い聞かせています。それに、わたしのスケッチや絵を見てくれた人たちは、みんながみんな、そう認めてくれているのです。

わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路<sup>こうじ</sup>の一つに住んでいます。といっても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根<sup>か</sup>ごしに、ずっと遠くの方まで見わたすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしよのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘<sup>おか</sup>のかわりに、地平線に見えるものといえば、ただ灰色の煙<sup>え</sup>突<sup>んとつ</sup>ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけではありません

し、あいさつの声をかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立っていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！ そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったのです。あの故郷の、沼地ぬまちのそばに生はえている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったのです。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちよつとわたしのところをのぞきこもうと、約束やくそくしてくれました。そのときからというもの、月は、ちやんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということなのです。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのでした。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめてたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きつと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれない。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に選びだしたものではありません。わたしが聞いたとおりの順序にならべたものなのです。すぐれた才能にめぐまれた画家なり、詩人なり、音楽家なりが、もしもこれをやってみようという気があれば、もつとりっぱなものにすることができるとちがいません。わたしがお見せするものは、ごく大きっぱに紙の上に書きつけた、ほんの輪郭りんかくにすぎません。そしてそのあいだには、わたし自身の考えもまじっているのです。というわけは、月はかならず、まい晩きてくれたわけではありませんし、ときには一つ二つの雲が、わたしと月のあいだにはいりこんでくることもあったからです。

## 第一夜

「ゆうべ」これは、月が話したとおりの言葉です。「わたしは、インドの澄すみきつた空気の中をすべって、ガンジス河にわたしの姿をうつしていました。わたしの光は、古いプラタナスの葉が、ちょうどカメの甲こうのように盛りあがって、茂しげっている生垣いけがきの中に、さしこもうとしていました。

するとそのとき、茂みの中から、カモシカのように身軽で、イブのように美しい、ひとりのインド娘むすめが出てきました。このインド娘は、なにかしら空気のように軽かろやかでしたが、それでいて、ぴちぴちとした、ゆたかなからだつきをしていました。わたしは、この娘のきやしやな皮膚ひふをとおして、考えていることを読みとることができました。とげのあるつる草が、娘の履物はきものを引きさきました。そんなことにはかまわずに、娘はいそいで先へ進んでいきました。そのとき、野獸やじゆうがのどのかわきをうるおして、河から帰ってきました。だが、娘を見るとびっくりして、そばをとびすぎていきました。むりもありません。この娘は、火のもえている明りを手に持っていたのです。娘はほのおが消えないように、その

まわりに手をかざしていましたから、わたしはかぼそい指の中の、いきいきとした赤い血を見るのができました。

娘は河に近よって、明りを流れの上におきました。すると、明りは流れにつれて、くだつていきました。ほのおは、いまにも消えそうにちらちらしました。それでも、もえつづけていきました。娘の黒い、きらきらかがやく眼めは、長い絹糸のふさのような、まつ毛の奥おくから、魂たましいのこもつた眼つきをして、そのほのおのあとを、じつと見おくっていました。

娘は、その明りが、自分の眼に見えるかぎりのあいだ、もえつづけていけば、愛する人はまだ生きている、けれども、もしも消えてしまえば、もうこの世にはいないのだということとを、知っていたのです。見れば、明りは、もえながらふるえました。娘の心も、もえあがつて、ふるえました。娘は膝ひざまずいて、祈いのりました。すぐそばの草の中に、ぬらぬらしたヘビがいました。けれども娘は、梵天王ぼんてんおうと自分の花婿はなむこのことしか考えていませんでした。

『あの人は生きている！』と、娘は喜びの声をあげました。すると、山々からこだまが返ってきました。

『あの人は生きている！』



## 第二夜

「きのうのことですよ」と、月がわたしに話しました。「わたしは、家にかこまれている、小さな中庭をのぞいていました。見ると、めんどりが一羽いちわ、十一羽のひなどりたちといっしょに寝ねていました。ところが、そのまわりを、ひとりのきれいな女の子が、はねまわっているのです。めんどりはびつくりして、コツコツコと鳴きながら、羽をひろげて、小さなひなどりたちをかばいました。そこへ女の子の父親が出てきて、女の子をしかりつけました。わたしはそれきり、もうそのことは考えずに、先へすべていききました。

ところが今夜、それもほんの二、三分前のことですが、わたしは、またおなじ中庭を見おろしていたのです。はじめのうちは、ひっそりとしていましたが、まもなく、あの小さな女の子が出てきて、そつと、とり小屋にしのびよりました。そして、かんぬきをはずして、めんどりとひなどりたちのいるところへ、しのびこみました。にわとりたちは大声でさけびながら、羽をばたばた打うって、飛びまわりました。けれども、女の子は、そのあとを追いかけるのです。わたしは壁かべの穴からのぞいていたので、このありさまが、手に取る

ようにはつきりと見えました。わたしは、このいけない子に、すっかり腹をたててしまいました。ですから、父親が出てきて、きのうよりもっとひどくしかりつけて、女の子の腕うでをつかんだときには、ほんとにうれしくなりました。女の子は、頭をうしろへそらせました。すると、青い眼めに大粒おおつぶの涙なみだが光っていました。

『おまえは、ここで何をしているんだ？』と、父親がたずねました。すると、女の子は泣きだしました。

『あたしはね』と、女の子は言いました。『この中へは行って、めんどりにキスをしてやって、きのうのおわびをしようと思ってたの。だけど、おとうさんには、どうしても、そのことが言えなかったのよ！』

それを聞くと、父親は、このむじやきな、かわいい子のひたいにキスをしてやりました。わたしも、その眼と口にキスをしてやりました」

## 第三夜

「このすぐ近くの、せまい小路で——そこはとてもせまいので、わたしは家の壁にそつて、ほんの一分間しか光をすべらせることができません。でもその一分間に、そこに動いている世間を知るのに十分なものを見るのですが——わたしは、ひとりの女を見ました。十六年前には、この女はまだ子供でした。そして、田舎の、古い牧師の家の庭で遊んでいたのです。バラの生垣は古くなつて、もう花ざかりをすぎていましたが、道の外まで生いしげつて、長い枝をリングの木立の中までのばしていました。まだあちこちに咲きのこつている花もありましたが、花の女王にふさわしいほど美しくはありませんでした。それでも、色もありましたし、香りもありました。しかしわたしには、牧師の小さな娘のほうか、ずっと美しいバラの花のように思われました。その娘は、のびにのびた生垣の下の足台に腰かけて、厚紙でこしらえた人形の、へこんだ頬にキスをしていました。

それから十年たつて、わたしは、その娘をもう一度見ました。こんどは、はなやかな舞踏室にいるのを見たのです。そのときは、ある金持の商人の、美しい花嫁になつてい

たのでした。わたしは娘の幸福をよろこんで、静かな夜ごとに、たずねてやりました。ああ、それにしても、だれひとりとして、わたしの明るい眼と、わたしのたしかな眼差しとを、考えてくれる者はありません！ わたしのバラの花も、牧師の家の庭のバラの花とおなじように、ずんずん若枝をのぼしていきました。

日常生活にも、悲劇があります。今夜、わたしは、その最後の一幕を見たのです。そのせまい小路で、その女は死の病にとりつかれて、寝台の上に横になっていました。ところが、その女の主人は、ただひとりの保護者であるはずなのに、乱暴で、冷酷な悪人だったものですから、その女のふとんをひきはがして、こう言いました。

『起きろ！ おまえの顔を見りや、だれだつていやんなつちまわあ！ さあ、おめかしでもしろ！ 金をかせぐんだ！ さもなきや、表へおつぽりだすぞ！ 早いとこ、起きた、起きた！』

『死神が、わたしの胸の中にいるんです！』と、その女は言いました。『ああ、どうか休ませてください！』

それでも、男は女をひきずり起して、顔におけしようにし、髪にバラの花をさして、窓ぎわにすわらせました。それから、火のもえている明りを、すぐそばへおいて、出ていき

ました。わたしは、女をじつと見つめていました。女は身動きもしないで、すわっています。と、手が膝ひざの上に落ちました。風のために窓がはねかえって、窓ガラスが一枚、ガシャンと割れました。けれども、女はじつとすわっていました。カーテンが女のまわりを、ほのおのようにはためきました。女は、もう死んでいたのです。あけはなたれた窓から、死んだ女が、人間のありかたをといっていました。牧師の家の庭の、わたしのバラの花が！」

## 第四夜

「わたしは、今夜、ドイツ喜劇を見てきました」と、月が言いました。「それは、ある小さな町でのことでした。馬小屋が芝居小屋になっていました。つまり、馬をつなぐ仕切りはそのまま残してあつて、これをかざりたてて、見物の棧敷さじきにしてあつたのです。そして木造のところは、どこもかしこも色とりどりの色紙で張りめぐらしてありました。ひくいてんじょう天井からは、小さな鉄のシャンデリアがさがっていました。そしてその上には、桶おけが一つさかさにはめこまれていて、まるで大きな劇場のように、プロンプターのベルが『リーン、リーン』と鳴りひびくのを合図に、その桶の中にシャンデリアが引き上げられるようになっていました。『リーン、リーン』小さな鉄のシャンデリアが、三、四十センチばかり跳ねあがりました。こうして、喜劇が始まることになったのです。

旅行中の、ある若い公こうしやく爵が、奥方おくがたといつしよに、ちょうどこの町を通りかかって、きよの芝居を見物にきていました。そのため、小屋は人でいっぱいでしたが、ただシャンデリアの下だけは小さな噴火口ふんかこうのようになっていました。そこには、ろうが『ポタリ、

ポタリ』と落ちるので、だれもすわる人がなかったのです。わたしは、なにもかもながめました。というわけは、小屋の中がひどくむし暑かったので、壁かべの小窓という小窓を、あけはなしておかずにはいられなかつたからです。そしてどの小窓の外からも、若い男や女が中をのぞきこんでいました。もつとも、中には警官がいて棒でおどしてはいましたが。オーケストラのすぐそばに、若い公爵夫妻が、二つの古い肘ひじ掛かけいすに腰こしかけているのが見えました。いつもなら、この席には町長夫妻がすわることになっていたのですが、今夜ばかりは、ほかの町の人たちとおなじように、木のベンチに腰かけなければなりませんでした。

『まあどうでしょう。タカがタカに追われたというものですわね!』と、奥さんたちが小声で話しあっていました。なにもかもが、このために、いっそうお祭らしくなっていました。シャンデリアがおどりがりました。のぞいている連中は、指をぶたれました。そうしてわたしは——そうです、この月のわたしは、ぜんたいの喜劇をいっしょに見たのです」

## 第五夜

「きのう」と、月が言いました。「わたしはそうぞうしいパリを見おろしていました。わたしの眼めは、ルーブル宮殿きゆうてんの中なかのあちこちの部屋の中へ入りこんでいきました。みすぼらしい身なりをした、ひとりの年とつたお婆ばあさんが——このお婆さんは貧しい階級の人でした——身分のいやしい番人の後について、がらんとした大きな玉座ぎよくざの間にはいつきました。お婆さんはこの広間を見たかったです。見ないではいられなかったのです。お婆さんがこの部屋までくるのには、なんどもなんども、ちよつとした贈り物おくものをしたり、言葉をつくして頼たのみこんだりしたのでした。

お婆さんはやせこけた手を合せて、まるで教会の中にもいるように、うやうやしくあたりを見まわしました。

『ここだったんだ！』と、お婆さんは言いました。『ここだ！』

こう言つて、金の縁飾ふちかざりのついている、立派なビロードの垂れさがった玉座に近づいて行きました。

『そこだ、そこだ！』とお婆さんは言いました。そして膝ひざをついて、まっかなじゆうたんにキスをしました。——お婆さんは泣いていたと思います。

『これはそのビロードじゃなかったんだよ』と、番人は言いました。そう言う番人の口もとには、微笑びしょうがただよいました。

『でも、ここでしたよ！』と、お婆さんは言いました。『こんなふうだったんですもの！』  
『こんなだったかもしれないが』と、番人は答えました。『そうじゃないね。窓はたたきこわされ、戸はひっぱがされて、床ゆかの上には血が流れていたのさ！——だがね、あんたは、わたしの孫はフランス国の玉座の上で死んだと、言おうと思えば言えるんだよ！』

『死んだ！』とお婆さんはくりかえしました。——それから、一言ひとことも話さなかつたよ  
うな気がします。ふたりは、まもなくその広間を出て行きました。夕暮ゆうぐれの薄明うすあかりが消え失うせました。そのためわたしの光は、二倍に明るくなって、フランス国の玉座のまわりの立派なビロードの上を照らしました。きみは、そのお婆さんはだれだったと思いますか  
？——

わたしはきみに一つの物語をしてあげましょう。それは七月革命のときのこと、あの世にも輝かがやかしい勝利の日の夕暮だったのです。一軒いっけん一軒の家が城じょうさい砦せいとなり、一つ一つ

の窓が堡壘ほつるいとなっていました。民衆はチュイルリー宮へ向つて突進とつしんしました。女や子供たちまでも、戦う人々の中にまじっていました。人々は宮殿の部屋や広間の中に押し入おつて行きました。ぼろを着た貧しい小さな男の子がひとり、年上の人たちのあいだで勇ゆうか敢んに戦っていました。しかしそのうちに、あちこちを銃じゆうけん剣けんでつかれて致命傷ちめいしようを受け、とうとう床の上に倒たおれました。それは玉座の間での出来事でした。人々は血まみれの男の子をフランス国の玉座の上に横たえて、傷のまわりにビロードを巻きつけました。血潮は王のまつかなじゆうたんの上に流れました。そのありさまはまったく一つの絵でした！ 華麗かれいな広間、戦っている人々の群れ！

引裂ひきさかれた旗は床の上に落ちていました。三色旗は銃剣の先にはためいていました。そして玉座の上には、青ざめて聖きよらかな顔をした貧しい男の子が、眼を天へ向けて横たわっていました。手足は死との戦いのために、もうぐったりしていました。あらわな胸、みすばらしい着物、そしてその上を半ばおおっている、銀のユリの花のついた、立派なビロードのひだ。この子がまだゆりかごの中にいたころ、そのそばで『この子はフランス国の玉座の上で死ぬだろう！』という予言がなされていたのです。母親の心は、新しいナポレオンを夢ゆめみていたのです。

わたしの光は、その子のお墓の上の不滅むぎわらぎく花の花輪にキスをしたものです。そして今夜は、年とったお婆さんのひたいにキスをしました。そのときお婆さんは、きみが絵にすることのできる『フランス国の玉座の上の貧しい男の子』の絵を、夢にみていました」

## 第六夜

「わたしはウプサラにいました」と、月が言いました。「わたしは作物の育たない畑と、わずかしか草の生えていない大きな平野を見おろしました。わたしはフュリス河に自分の姿を映しました。ちょうどそのとき、蒸気船にびつくりした魚が、葦のあいだに逃げこみました。わたしの下の方を雲が走っていましたが、長い影をオーディンの墓、トールの墓、フレイヤの墓と人々が呼んでいる小高い丘の上に投げていききました。これらの丘の上をおっている薄い芝生の中には、人々の名前が切りこまれていました。ここには旅行者たちが自分の名前を刻みつけることのできるような記念石もなければ、どこかに自分の姿をえがかせることのできるような岩壁もありません。ですから、ここを訪れる人々は芝生を刈りとらせました。はだの見える地面が、大きな文字や名前となって現われています。そしてそういう文字や名前が、大きな丘の上に張られた一つの網のようになっているのです。いわば一種の不滅です。もつとも、それをまた新しい芝生がおおっていくのですが。そこに、ひとりの男が立っていました。歌い手でした。男はひろい銀の輪のついた蜜

酒ゆのさかずきを飲みほして、一つの名前をつぶやきました。そして風に向って、その名前をだれにももらさないと頼たのみました。ところが、わたしは聞いてしまったのです。わたしはその名前を知っていました。その名前の上には、伯はくしやく爵かくむりの冠かんむりがきらめいています。だからこの男は、その名前を大声で言わなかったのです。わたしはほほえみしました。この男の上には、詩人の冠かんむりがきらめいているではありませんか！ エレオノーラ・デステの高貴さはタツソーの名前と結びついています。それからまたわたしは知っています、どこに美のバラが咲さくかということ——！

月がこう言ったとき、一いっぺん片の雲うんが通りすぎました。——詩人とバラのあいだには、どんな雲も割りこまないでいてもらいたいものです。

## 第七夜

「波打ちぎわにそつて、カシワの木とブナの木がひろがっています。そこはいかにもすがすがしい森で、よい香りかおがただよっています。春になると、幾いくひやく百ひやくともしれないナイチンゲールおとすが訪れてきます。この森のすぐ近くに海があります。永遠に姿を変えている海です。そしてこの森と海とのあいだを、広い国道が通っています。馬車がつぎからつぎへと走っています。けれどもわたしは、その後については行きません。わたしの眼めは、たいてい一つの点にとまるのです。そこには一つの大きな塚つかがあります。キイチゴの蔓つるとリンボクが、石の間からのびています。ここに、自然の中の詩があるのです。きみは、人々がこれをどんなふうにかかっていると思いませんか？ そうだ、わたしがそこで、きのうの夕方から夜にかけて聞いたことだけを話してあげましょう。

最初に金持の農夫がふたり、馬車に乗ってやってきました。

『そこらにあるのは、たいした木じゃないか！』と、ひとりが言いました。

『一本あたり、十駄じゅうだのまきはとれるよ！』と、もうひとりが答えました。

『この冬もきびしい寒さになるぜ。去年は一坪つぼ十四ターレルで売ったつけな！』  
 こう言つて、ふたりは通りすぎて行きました。

『ここは道が悪いなあ！』と、べつの馬車で来た人が言いました。

『そりやあ、あのいまましい木のためさ！』と、つれの者が答えました。

『なにしろここは、海のほうからしか風が吹ふいてこないんだからね！』

こう言いながら、このふたりも通りすぎて行きました。馱馬車も通りかかりました。こんなにするばらしい景色けしきのところへ来ても、みんな眠ねむっていました。御者ぎよしゃはラツパを吹きならしました。そして心の中では、『おれの吹き方はうまいもんだ。それによ、ここへ来ると、ほんとうにいい音がでる。だが、みんなはどう思っているかな？』と、こんなことばかりを考えていました。こうして、馱馬車も行つてしまいました。

こんどは、ふたりの若者が馬をとばせてやってきました。この血の中には青春とシャンパン酒があるな、とわたしは思いました。このふたりも、口もとに微笑びしょうをうかべながら、苔こけのむした丘おかと薄暗うすい茂みしげのほうをながめました。

『水車屋のクリスチーネといっしょに、ここを散歩したいなあ！』と、ひとりが言いました。

それから、ふたりは駆け去りました。あたりの花は、たいへん強くにおいました。そよ風は静かにまどろみました。海はまるで、深い谷の上にひろがっている空の一部になったかのようにでした。

また一台の馬車が通りすぎました。中には六人の客が乗っていました。そのうち四人は眠っていました。五人目の男は、自分によく似合うはずの、新しい夏服のことを考えていました。六人目の男は、御者のほうへからだを乗りだして、あそこに積み重ねてある石には、なにか特別のことでもあるのかとたずねました。

『いいや』と、御者は言いました。『ただ、石が積み重ねてあるだけでさあ。だが、あつちの木のほうとなると、特別のことがありますて！』

『どうしてだい？』

『ええ、特別のことがありますとも！ 旦那だんな、冬になって、雪が深くつもりますつてえと、何もかも一面に平らになつてしまいまさ。そんなとき、あつしの目印になるのが、あの木でしてね、あいつを頼たよりにして行くからこそ、海にもはまりこまねえですむつてもんでさ。だからね、あいつは特別なんですよ！』——こう言つて、走り去りました。

そこへ、ひとりの画家がやってきました。その眼はきらめきました。一言ひとことも物を言い

ませんでした。画家は口笛くちぶえを吹きました。ナイチンゲールが歌いはじめました。一羽いちわと、だんだん高く。

『だまれ!』と、画家はどなつて、すべての色と濃淡のうたんとを非常にくわしくかきとめました。『青、薄紫うすむらさき、濃褐のうかつしよく色!』これはすばらしい絵になるでしょう! 画家は、鏡がものの姿をうつすように、それをうつしとったのです。そしてそうしながら、ロツシー二の行進曲を口笛で吹いていました。

最後にやってきたのは貧しい女の子でした。女の子は塚のそばで休んで、荷物をおろしました。美しい青白い顔を森のほうへ向けて、そこからひびいてくる物音に耳をかたむけました。海のかなたの大空を見上げたとき、女の子の眼はきらきらと輝かがやきました。両手が合されました。『主いのの祈り』をとなえたように思われます。この子は自分でも、自分自身の中を流れている感情がわかりませんでした。しかし、わたしは知っています。長い年月がたつうちには、この瞬間しゆんかんとまわりの自然とが、画家がきまつた絵具でえがきだしたよりもずっと美しく、さらにいつそう忠実に、この子の思い出のうちにときおり生きかえってくるだろうということを。わたしの光は、暁あかつきの光が女の子のひたいにキスをするまで、この子の後について行きました!」



## 第八夜

重い雲が空一面にたれこめて、月はまったく姿を現わしませんでした。わたしは二重のさびしい思いにかられながら、わたしの小部屋の中に立って、いつも月が輝き出てくるあたりの空をながめていました。わたしの思いは広くかけめぐりました。そして、毎晩あんなに美しい話を聞かせてくれたり、すばらしい絵を見せてくれたりした、偉大な友だちのことに思い及びました。

そうです、いままでにこの月の体験しなかったことがあるでしょうか！ ノアの<sup>だいこう</sup>大洪水のときにも、その水の上を帆走<sup>ほほし</sup>つたのです。そして、ちょうどいまわたしにほほえみかけているのと同じように、箱船<sup>はこぶね</sup>の上にほほえみかけて、やがて花咲き出ようとす新しい世界の慰め<sup>なぐさ</sup>をもたらししたのです。イスラエルの人民が泣きぬれてバビロンの河<sup>かわ</sup>辺に立つたとき、あの月は<sup>たてごと</sup>豎琴のかかっているヤナギの木のあいだから、悲しげにそれをのぞいたこともあるのです。ロメオが<sup>ろたい</sup>露台の上によじのぼって、まことの愛の接吻<sup>せつぶん</sup>が天使の思いのように天へと<sup>ぼって</sup>行つたとき、まるい月は黒い糸杉<sup>いとすぎ</sup>のあいだに半ばかくれて、

澄みきつた空に浮んでいたこともあるのです。また、セント・ヘレナの島に幽閉された英雄が、荒寥たる岩頭に立つて、胸に雄志を抱きながら大海原をながめやっつける姿を見たこともあるのです。

そうです、月にとって話せないようなことが何かあるでしょうか！ この世界の生活は、月にとっては一つのおとぎばなしなのです。なつかしい友よ、今夜わたしはきみの姿を見ません。きみの訪問の記念に、どんな絵をもかくことができませぬ。——こうしてわたしが、夢にふけりながら雲の中を見上げますと、そこが明るくなりました。それは一すじの月の光でした。けれども、その光はすぐまた消えてしまいました。黒い雲がすべて行ったのです。しかし、それこそ挨拶でした。月がわたしに送ってくれた、やさしい晩の挨拶だったのです。

## 第九夜

空気はまた澄みわたりました。幾晩か、たつていました。月は上弦になつていました。わたしはふたたびスケッチをしようという考えを起しました。——月の話してくれたことをお聞きください。

「わたしはグリーンランドの東海岸まで、北極鳥と、泳いでいるクジラの後を追つて行きました。氷と雲とにおおわれた裸の岩山が谷をとりまいていました。ヤナギとコケモモが咲きそろう、よい香りのするセンオウは甘い匂いをひろげていました。わたしの光は弱く、わたしのまるい顔も、莖からもぎとられて何週間も水の上をただよっているスイレンの葉のように、青ざめていました。北極光の冠が、もえさかかっていました。その光の輪は広くて、光の線は渦巻く火柱のように大空ぜんたいにひろがって、緑と紅とにきらめいていました。

この地方に住んでいる人たちが踊りと娯楽のために集まっていますが、この美しさを見ても、ふだん見なれているために、だれひとり驚く者はありませんでした。この人たち

は、『死人の魂は、海象の頭といっしよに踊らせておけばいい』という、この人たちの信仰に従って考えていたのです。心も、眼も、歌と踊りにばかり向けられていました。輪になったまん中に、手太鼓を持ったひとりのグリーンランド人が毛皮も着ないで立っていて、海豹捕りの歌の音頭をとっていました。すると合唱隊は『エア、エア、エア！』とそれに応じました。そうして、白い毛皮を着て、まるい輪をつくって跳ねまわりました。そのありさまは、まるで北極熊の舞踏会のようなものでした。眼と頭が、思いきりはげしく動いていました。

そのうちに、裁判と判決が始まりました。仲違いをしている人たちが前に歩みでて、まず恥ずかしめを受けた者が相手の悪いことを即興の歌にして、大胆にあざけつて言いたてました。こうしたことはみんな、太鼓に合わせて踊っている最中に行われるのです。訴えられたほうの者も、同じようにずる賢くそれに答えます。すると、集まっている人たちが笑いさざめきながら、ふたりのあいだに判決をくだすのでした。岩山はとどろき、氷塊がくずれ落ちました。落下する大きな塊りが、途中でこなごなにくだけ散りました。それはグリーンランドらしい、美しい夏の夜でした。

そこから百歩ばかり離れたところに、入口のひらいた、皮のテントがあって、その中に

ひとりの病人がねていました。その暖かい血の中にはまだ生命が流れていました。でも、もうこの男は死ななければなりませんでした。自分でもそう思っていましたし、まわりの者もみんなそう思っていたのです。ですから、その男の妻は、後になって死人のからだにさわらないでもいいように、夫のからだのまわりに皮の衣をしつかりと縫いつけて、たずねました。

『あんたは、あの岩の上の固い雪の中に埋めてもらいたいのか？ それならわたしは、そこをあなたのカヤックとあなたの矢で飾ってあげるよ。アンゲコックがその上を踊ってくれよう。それとも、海の中へ沈めてもらいたい？』

『海の中へ』と、男はささやいて、悲しげな微笑を浮かべながら、うなずきました。

『あそこは気持のいい夏のテントだからね』と、妻は言いました。『あそこなら海豹も何千となく跳びはねているし、足もとには海象がねむっているんだもの。漁はたしかで、おもしろいにちがいないわ！』

それから、子供たちは泣き悲しみながら、窓に張ってあった皮を引きちぎりました。こうして瀕死の病人を海へ、大波のうねっている海へ、連れだそうなのです。その海こそは、生きているあいだはこの男に食べ物を与え、いまは、死んでから後の安息を与える

のです。墓標となるのは、夜となく昼となくたえず変化しながら、ただよっている氷山です。その氷塊の上では海豹がまどろみ、海つばめはその上を飛びこえて行くのです」

## 第十夜

「わたしはひとりの老嬢オールドミスを知っていました」と、月が言いました。「この人は冬になると、いつも黄色いしゆすの外がいとう套を着ていましたが、それはきまって新しいものでした。それがこの人にとつての、ただ一つの流行だったのです。夏には、いつも同じ麦ぼうしわら帽子をかぶっていました。そして、同じ青せい灰かい色しよくの着物をきていたような気がします。

この人は通りをへだてた向いにいる、ひとりの年とつた女友だちのところへ出かけて行くだけでした。けれども、その友だちも死んでしまいましたので、去年はそれさえもしませんでした。わたしの老嬢はいつもひとりぽちちで、窓の中がわで立ち働いていました。そこには夏じゆう美しい花が咲さき、冬には毛織帽子の上にきれいなタガラスがさしてありました。ところが先月は、この人はもう窓ぎわにすわっていませんでした。でも、まだ生きてはいたのです。わたしには、それがよくわかつているのです。というのは、この人があの女友だちとよく話していた大旅行に出かけるのを、わたしはまだ見ていなかったからです。

『そうよ』と、そのとき、この人は言っていました。『わたしはいつか死んだら、一生のうちにしたよりもっと大きな旅行をするのよ。ここから六マイル離れたところに、わたしの家の墓地があるわ。そこへわたしは運ばれていって、親類の人たちといっしょに眠るのよ』

ゆうべ、その家の前に一台の車がとまりました。人々は一つの棺を運びだしました。それでわたしは、あの人が死んだことを知りました。人々は棺のまわりにわらをかけました。それから、車は動きだしました。そこには、去年一度も家から出たことのない老嬢が、静かに眠っていました。

車はまるで楽しい旅にでも出かけるように、すばらしい勢いで町から出て行きました。国道に出ると、いつそう早くまりました。御者は二、三度そつとうしろを振り向きました。もしかしたらあの人が、黄色いしゆすの外套を着て、棺の上にすわってはいはしないかと、心配しているようでした。そのため御者はめちやめちやに馬に鞭をあてたり、手綱をぐつと引きしぼったりしました。それで、馬はふうふう泡をふきだしていました。馬は若くて元気でした。ウサギが一ぴき、道を横ぎりました。馬はまっしぐらに走って行きました。もの静かな老嬢は、生きているときは、年がら年じゅう家の中の同じ場所だけをゆっ

くりと動きまわっていましたが、死んだいまとなって、このひろびろとした国道を真一文字に走って行くのでした。

わらのむしろで包んであった棺が跳ね上がって、道の上に落っこちました。ところが、馬と御者と車とは、そんなことにはかまわずに、荒れ狂ったように駆け去ってしまいました。ヒバリが歌いながら野から舞いあがって、棺の上のほうで朝の歌をさえぎりました。それから、棺の上にとまって、くちばしでむしろをつつきました。そのようすは、まるでさなぎを裂きやぶろうとでもしているようでした。それからヒバリは、ふたたび歌いながら、大空に舞い上がりました。そしてわたしは赤い朝雲のうしろに引きさがつたのです」

## 第十一夜

「婚こんれい礼の祝しゆくえん宴がありました」と、月が話しました。「歌がうたわれ、健康を祝つてさかずきがあげられました。すべてが豊かで、はなやかでした。お客たちも帰つていきました。もう真夜中をすぎていました。母親たちは花はなむこ婿と花はなよめ嫁にキスをしました。わたしは、花婿花嫁がふたりだけになったのを見ました。けれども、カーテンがほとんどすっかり引かれていて、ランプがこの楽しい部屋を照らしていました。

『みんな帰つてくれてありがとう！』と、花婿は言つて、花嫁の両手と唇くちびるにキスをしました。花嫁はほほえみ、そして泣きました。蓮はすの花が流れる水の上に休らうように、ふるえながら花婿の胸に頭をもたせて、そしてふたりはやさしい幸福な言葉をささやきあいしました。『ぐつすりおやすみ』と、花婿は言いました。花嫁はカーテンをわきへ引きよせました。

『まあ、なんてきれいなお月さまなんでしょう！』と、花嫁が言いました。『ごらんさいな、あんなに静かで、あんなに明るいわ！』それからランプを消しました。楽しい部屋

の中はまつくらになりました。しかしわたしの光は、花婿の眼めが輝かがやいていたように、輝いていました。——女性よ、詩人が生命の神秘をうたうときには、そのたてごと 豎琴にキスをなさい！」

## 第十二夜

「わたしはポンペーの一つの光景をきみに話してあげましょう」と、月が言いました。

「わたしは『墓場通り』といわれている郊外こうがいにいました。そこには美しい記念碑きねんひがいくつか立っています。そのむかし狂喜きやうきした若者たちが、ひたいにバラの花を巻いて、美しいライスの姉妹しまいたちと踊おどったところです。いま、そこは死んだように静まりかえっています。ナポリに勤務しているドイツ兵が警備にあたっていて、トランプやさいころ遊びをやっています。

外国人の一団が警備兵につきそわれて、山の向うから町の中へはいつてきました。この人たちは、わたしの照り輝かがやく光の中で、墓の中からよみがえった都市を見ようと思つたのです。そこでわたしは、広い熔岩ようがんをしきつめた街路にのこっている車輪あしの跡を見せてやりました。それからまた、戸口に書いてある名前や、昔むかしのままにかかっている看板を見せたりやったりしました。その人たちは、小さい中庭では貝かきがらで飾かられた噴水ふんすい受けの水すい盤ばんを見ました。しかし、いまは水も噴ふき上がってはいませんでした。また金属製の犬が

戸口の番をしている色あざやかな部屋々々からも、歌声一つひびいてはきませんでした。

それは死の都でした。ただベスビオの山だけは、あいもかわらず永遠の讃歌をとどろかしていました。その一つ一つの詩句を、人間は新しい爆発と呼んでいるのです。わたしたちはビーナスの神殿に行きました。それはきらきら光るまっ白な大理石でできていました。広い階段の前に高い祭壇があつて、円柱のあいだに生えているしだれヤナギはいきいきとしていました。空気はすきとおつて碧色をしていました。背景にはベスビオの山が黒々とそびえていて、そこから噴きでる火は笠松の幹のように立ちのぼっています。煙の雲が夜の静けさの中に照らしだされて、笠松のこずえのように、血のように赤くひろがっていました。

この一団の中にひとりの歌姫がいました。この歌姫はほんとうにすぐれた声楽家で、わたしはヨーロッパの大都会でこの人がほめそやされているのを見たことがあります。人々が悲劇の劇場に近づいたとき、みんなは円形劇場の石の段の上にすわりました。こうして数千年前と同じように、ふたたびこの劇場のわずかな場所が人々に占められたのです。舞台はまだ昔のままになっていました。壁を塗った側面と、背景に二つのアーチがあつて、そこから以前の時代と同じ装飾が見えました。つまりそれは自然そのもののことで、

ソレントとアマルフィのあいだの山々です。

歌姫はたわむれに古代の舞台上がって歌いました。この場所が靈感れいかんを与えたあたのです。わたしは思わずも、鼻息あらく、たてがみをなびかせつつ走り去るアラビアの野馬を思いださずにはいられませんでした。歌姫の歌には、ちようどそれと同じ軽やかさと確かさとがありました。またわたしは、ゴルゴタの丘おかの十字架じゆうじかの下で苦しみ悩む母親なやのことを思わずにはいられませんでした。ちようどそれと同じ心にしみ入る、深い苦痛が現われていました。そしてあたりには、数千年の昔と同じように、ふたたび拍手はくしゆと歓呼かんこの聲がひびきわたりました。

『しあわせな人！ すばらしい才能にめぐまれた人！』と、みんなは歓声をあげました。三分後には舞台は空からになりました。すべてが去りました。もう物音一つ聞えなくなりました。あの一団は歩み去ったのです。しかし、廃墟はいきよはあいもかわらず立っていました。これからもなお数百年のあいだ、このままに立ちつづけることでしょう。そしてこの瞬間しゆんの喝采かつさいのことも、美しい歌姫のことも、その歌声やほほえみのことも、だれひとり知る者もなく、忘れられ、過ぎ去ってしまうのです。わたし自身にとつても、この一時いつときはすでに消え去った思い出なのです」



## 第十三夜

「わたしはある編集者の窓をのぞきこみました」と、月が言いました。「そこはドイツのどこかでした。その部屋には、りっぱな家具と、たくさん書物と、乱雑に積みかさねた新聞がありました。若い男がいくにん人もいました。編集長自身は大きな机のそばに立っていました。二冊の小さい本が、いずれも若い作家の書いたものですが、それが批評されることになっていました。

『この一冊はぼくに送ってよこしたもののなんだが』と、編集長は言いました。『ぼくはまだ読んでいない。だが、きれいな装幀そうていだね。内容はきみたちどう思う?』

『ええ』と、ひとりが言いました。この人自身詩人でした。『とてもいいですよ。すこし長たらしくてならだらしていますが、まあなんといいっても若い人ですからね。詩句にしたって、もうすこし直すこともできるでしょう。思想はたいへんおんけん穩健です。むろん、ごくありふれた考え方ですけども。しかし、どう言うべきでしょう? 何か新しいものを見つければよかったって、いつも見つかるわけじゃないんですから、ほめてやっていいと思います。

といったところで、この男が詩人としてりっぱなものになろうなどは、ぼくもけっして思つてはいません。ともかく知識もあり、すぐれた東洋学者でもあり、またたいへん穩健な批評をする人なんです。ぼくの「家庭生活についての随想録」にりっぱな批評を書いたのは、この男なんです。若い人に対しては寛大でいてやりたいものです」

『いや、あれはまったくの愚物ですよ』と、この部屋にいたもうひとりの紳士が言いました。『詩では凡庸ほんようということぐらい悪いことはありませんよ。それにあの男ときたら、一歩も凡庸以上に出ていないんですからね』

『かわいそうなやつ!』と、第三の男が言いました。『しかもこの男の叔母おばさんは、この男のことを喜びとしているんです。その叔母さんというのは、編集長さん、あなたのこのあいだの翻訳ほんやくにあんなに大勢の予約者を集めてくれた人なんですよ——』

『ああ、あの親切な婦人ね! うん、ぼくはこの本をごく簡単に批評することにしたよ。疑う余地なき才能! 歡迎かんげいすべき天賦てんぷの素質! 詩の園そのに咲いた一輪の花! 装幀さうざんもいい、などとね。ところで、もう一つの本はどうだろう! あの著者は、ぼくにも買わせようという腹らしい。——評判がいいよ。あの男は天才をもっているんだね。きみたち、そう思わないかね?』

『ええ、みんなはそう言いたててますね』と、さっきの詩人が言いました。『だけど、すこし粗雑そざつですよ。コンマの打ち方なんか、あまりにも天才的すぎますね』

『あの男はこきおろしてやって、ちつとは腹をたてさせたほうがためになりますよ。さもなきや、のぼせあがつてしまいますからね』

『しかし、それは不当です』と、第四の男が大声に言いました。『そんな小さい欠点ばかりをかぞえたてないで、いいものを喜びましょうよ。しかもここには、それがたくさんあるんです。まったく、あの男は衆をぬきんでていますよ』

『とんでもない！ もしあの男がほんとうの天才だとすれば、そのくらいの鋭い非難すんどにだつて耐えることができるさ。あの男を個人的にほめる者はいくらでもある。われわれはあの男を慢心まんしんさせないようにしようじゃないか！』

『疑う余地なき才能！』と、編集長は書きました。『だれにもありがちの不注意。この著者もまた不幸な詩句を書くことは、二十五ページに見いだされる。そこには二つの母音ぼいんち重複ようぶくがある。古人についてさらに研究されんことを切望する、云々うんぬん』

わたしはそこを立ち去りました」と、月は言いました。「それから、その叔母さんの家の窓をのぞいてみました。そこには評判のいいおとなしい詩人が、招待されたすべての客

から賞讃しょうざんされてすわっていました。この人は幸せしあわせでした。

わたしはもうひとりの詩人を、粗雑な詩人をさがしました。この人もまた、ひとりの後援者うえんしゃのところに集まった大勢の人々の中にいました。そこでは、もうひとりの詩人の本が話題にのぼっていました。

『わたしはあなたの本も読みましょう』と、後援者が言いました。『しかし正直しょうじきに言う、あなたも知つての通り、わたしは自分の思っていることをなんでも言ってしまう人間ですが、こんどの本に対してはそんなに期待していませんよ。あなたはあまりに粗雑すぎる！ 空想的すぎる——といっても、あなたが人間としてきわめて尊敬すべき人であることは、わたしも認めています』

ひとりの若い娘むすめが片隅かたすみにすわって、本を読んでいた。

——天才のほまれはどろにまみれるれど、

凡庸のわざは空高くかかげらる！——

『こは古き語り草なれど、

なおつねに新たなり！』

## 第十四夜

月が話しました。「森の道にそつて、二軒にけんの農家があります。戸口は低く、窓は上と下とについています。あたりにはサンザシやヘビノボラズが生えています。屋根は苔こけでおおわれていて、黄色い花やイワレンゲが咲さいています。小さい庭にはキャベツとばれいしよがあるだけですが、生垣いけがきにはニワトコが花をいっぱい咲かせています。

その下に、ひとりの小さい女の子がすわっていました。その子は鳶色とびいろの眼めで、二軒の家のあいだに立っている古いカシワの木をじつと見つめていました。この木は枯かれた高い幹くを持っているのですが、その上の方は鋸のこぎりでひき切られていました。そこにコウノトリが巣すをつくっていました。ちょうどいまコウノトリがその上に立って、くちばしをガチャガチャやっています。

ひとりの小さい男の子が出てきて、女の子のそばに並ならびました。このふたりは兄きょうだい妹まいだったのです。

『何を見てるんだい？』と、男の子はききました。

『コウノトリを見るのよ』と、女の子が言いました。『おとなりのおばさんがね、コウノトリが今夜あたしたちに小さい弟か妹を連れてきてくれるって言ったの。だからあたし、コウノトリが来るのを見ようと思つて、気をつけてるのよ』

『コウノトリなんて、なんにも持つてきやしないさ』と、男の子が言いました。『いいかい、おとなりのおばさんは、ぼくにもおんなじことを言つたけど、そう言つたとき笑つてたんだ。それでぼく、おばさんに、きつとですかつて、きいたのさ。——だけどおばさんは返事ができなかつたんだぜ。だからぼくには、ちゃんとわかちやつたんだ。コウノトリの話なんて、ぼくたち子供にほんとうらしく思わせるだけのことさ!』

『だけど、そんなら赤ちゃんはどこから来るの?』と、女の子はたずねました。

『神さまが連れてきてくださるのさ』と、男の子は言いました。『神さまは外がい套とうの下に入れて連れていらつしやるんだよ。けども、人間は神さまの姿を見ることができない。だから、神さまが赤あかん坊ぼうを連れていらつしやるのも、ぼくたちには見えないのさ』

その瞬しゆん間かん、ニワトコえだの木の枝の中でザワザワという音がしました。子供たちは両手を合せて、互たがいに顔を見合せました。たしかに神さまが子供を連れてきたのです。——ふたりは手を取り合いました。家の戸があきました。それはおとなりのおばさんでした。

『さあ、はいつてらっしゃい』と、おばさんは言いました。『コウノトリが何を持ってきてくれたかごらん下さい。ちっちゃな弟さんよ!』すると、子供たちはうなずきました。ふたりとも、その弟が来たことを、もうちゃんと知っていたのです」

## 第十五夜

「わたしはリユーネブルクの荒野こうやの上をすべて行ききました」と月が言いました。「道ばたに小屋が一軒いっけん、ぼつんと立っていました。葉の散り落ちた藪やぶが二つ三つ、そのすぐそばにありました。そこでは、どこからか迷いこんできたナイチンゲールが歌をうたっていました。けれども、ナイチンゲールは夜の寒さのために死ななければなりません。わたしが聞いたのは、そのナイチンゲールのこの世での最後の歌だったのです。

暁あかつきの光が輝かがやきました。旅人の一隊がやってきました。それは外国へ移住して行く農夫の一家でした。船でアメリカへ渡わたろうとして、ブレーメンかハンブルクへ行くところだったのです。この人たちはアメリカへ行けば、幸運が、夢ゆめみている幸運が、花を開くもの思っていたのでした。女たちは小さい子供を背中に背負おっていました。いくらか大きい子供たちはそのそばを跳とびはねていました。やせこけた一頭の馬が、わずかばかりの家具をのせた車を引いていました。

つめたい風が吹ふいてきました。それで小さい女の子は、母親のそばにぐつとからだをす

り寄せました。母親は、かけはじめたわたしのまるい月の輪を見上げながら、故郷でなめてきたひどい苦勞のことを思いうかべたり、払うことのできなかつた重い税金のことを考えたりしていました。それは、この一行のだけれどもが考えていることでした。だから赤々と輝く暁の光は、ふたたび訪れてくるであろう幸運の太陽の福音のように思われたのです。いまにも死にそうなナイチンゲールの歌声を聞いても、それは悪い予言者ではなく、幸運の告知者のように聞えたのです。風がヒューヒューと鳴っていました。ですから人々には、ナイチンゲールのうたう歌がわかりませんでした。

『安らかに海を渡れ！ 長い船路のために、おまえは持てるすべてのものを支払った。貧しくよるべなく、おまえはおまえのカナンの地を踏むだろう。おまえはみずから売り、妻を売り、子供を売らねばならない。だが、長く苦しむことはない！ 香り高い葉かげに、死の女神がすわっている。その歓迎のキスは、おまえの血の中に死の熱病を吹きこむのだ。ゆけよ、ゆけ、盛りあがる大波を越えて！』

旅人の一行は、喜んでナイチンゲールの歌に聞きいりました。というのは、その歌がやがて来る幸福をうたっているように思われたからです。薄雲のあいだから日が輝いてきました。農夫たちは荒野を横切つて教会へ行きました。黒い着物を着て、頭を厚い白い麻

布さぬのでつつんだ女たちの姿は、教会の中の古い絵からおりたってきたのではないかと思われ  
 ました。このあたりを取り巻いているものは、ひろびろとした荒こうりよう寥ようたる環かんきよう境じようば  
 かりでした。乾ひからびた褐かつしよく色しよくのヒースと、うす黒く焦こげた芝しばくさ草くさが、白い砂さす洲すのあい  
 だに見えるだけでした。女たちは讚美歌さんびかの本を持って、教会のほうへ行きました。ああ、  
 祈いのれよ！ 盛りあがる大波のかなたの墓場へさすらい行く人々のために祈れよ！」

## 第十六夜

「わたしはひとりのプルチネツラを知っています」と、月が言いました。「見物人はこの男の姿を見ると、大声にはやしたてます。この男の動作は一つ一つがこっけいで、小屋じゆうをわあわあと笑わせるのです。けれどもそれは、わざと笑わせようとしているわけではなく、この男の生れつきによるのです。この男は、ほかの男の子たちといっしょに駆けまわっていた小さいころから、もうプルチネツラでした。自然がこの男をそういうふうにつくっていたのです。つまり、背中に一つと胸に一つ、こぶをしょわされていたのです。ところが内面的なもの、精神的なものとなると、じつに豊かな天分あたを与えられていました。だれひとり、この男のように深い感情と精神のしなやかな弾力性だんりよくせいを持っている者はありませんでした。

劇場がこの男の理想の世界でした。もしもすらりとした美しい姿をしていたなら、この男はどのような舞台ぶたいに立つても一流の悲劇役者になっていたことでしょう。英雄えいゆう的なもの、偉大いだいなものが、この男の魂たましいにはみちみちていたのでした。でもそれにもかかわらず、

プルチネツラにならないければならなかったのです。苦痛や憂鬱ゆううつさえもがこの男の深刻な顔にこっけいな生真面目きまじめさを加えて、お気に入りの役者に手をたたく大勢の見物人の笑いをひき起すのです。

美しいコロンビーナはこの男に対してやさしく親切でした。でもアルレッキーノと結婚けつこしたいと思っていました。もしもこの『美女と野獣やじゆう』とが結婚したとすれば、じつさい、あまりにもこっけいなことになったでしょう。プルチネツラがすっかり不機嫌ふきげんになつておるときでも、コロンビーナだけはこの男をほほえませることのできる、いや大笑いさせることのできるただひとりの人でした。最初のうちはコロンビーナもこの男といっしょに憂鬱ゆううつになっていましたが、やがていくらか落ちつき、最後には冗談じょうだんばかりを言いました。

『あたし、あなたに何が欠けているか知ってるわ』と、コロンビーナは言いました。『それは恋愛れんあいなのよ』

それを聞くと、プルチネツラは笑いださずにはいられませんでした。

『ぼくと恋愛だつて！』と、この男は叫びました。『そいつはさぞかし愉快ゆかいだろうな！見物人は夢中むちゆうになつて騒さわぎたてるだろうよ！』

『そうよ、恋愛よ!』と、コロンビーナはつづけて言いました。そしてふぎけた情熱をこめて、つけ加えました。『あなたが恋こいしているのは、このあたしよ!』

そうです、恋愛と関係のないことがわかっているときには、こんなことが言えるものなのです。すると、プルチネツラは笑いこらげて飛び上がりました。こうして憂鬱もふつとんでしまいました。けれども、コロンビーナは真実のことを言ったのです。プルチネツラはコロンビーナを愛していました。しかも、芸術における崇すうこう高なもの、偉大なものを愛するのと同じように、コロンビーナを高く愛していたのです。コロンビーナの婚礼の日には、プルチネツラはいちばん楽しそうな人物でした。しかし夜になると、プルチネツラは泣きました。もしも見物人がそのゆがんだ顔を見たならば、手をたたいて喜んだことでしょう。

ついこのあいだ、コロンビーナが死にました。葬そうしき式の日には、アルレッキーノは舞台に出なくてもいいことになりました。この男は悲しみに打ち沈しずんだ男やもめなんです。そこで監かんとく督は、美しいコロンビーナと陽気なアルレッキーノが出なくても見物人を失望させないように、何かほんとうに愉快なものを上演しなければなりません。そのため、プルチネツラはいつもの二倍もおかしく振舞ふるまわなければならなかったのです。プルチ

ネツラは心に絶望を感じながらも、踊ったり跳ねたりしました。そして拍手喝采を受  
けました。

『すばらしいぞ！　じつにすばらしい！』

プルチネツラはふたたび呼び出されました。ああ、プルチネツラは、ほんとうに測りし  
れない価値のある男でした！

ゆうべ芝居が終つてから、この小さな化物はただひとり町を出て、さびしい墓地のほ  
うへさまよつて行きました。コロンビーナの墓の上の花輪は、もうすっかりしおれていま  
した。プルチネツラはそこに腰をおろしました。そのありさまは絵になるものでした。手  
はあごの下にあて、眼はわたしのほうに向けていました。まるで一つの記念像のようでした。  
墓の上のプルチネツラ、それはまことに珍しいこっけいなものです。もしも見物人が  
このお気に入りの役者を見たならば、きつとさわぎたてたことでしょう。

『すばらしいぞプルチネツラ、すばらしいぞ、じつにすばらしい！』

## 第十七夜

月が話してくれたことを聞いてください。「わたしは幼年学校の生徒が士官になって、はじめてりっぱな制服を着たのを見たことがあります。舞踏会ぶとうかいの衣裳いしやうをつけた若い娘むすめや、宴会服えんかいふくを着て楽しそうにしている公こう爵しやくの若い花嫁はなよめを見たこともあります。けれどもどんな喜びも、わたしが今夜見たひとりの子供、四つになる小さい女の子の喜びには、とうていくらべることができません。

その子は新しい青色の着物と新しいバラ色の帽子ぼうしをもらって、いまそのすばらしい晴れ着を着たところでした。みんなが明りを求めて呼んでいました。窓からさしこむ月の光だけでは十分ではないので、もつと明るい光で照らさなければならなかったのです。そこには小さい女の子が人形のように、腕うでを心配そうに着物からはなし、指を一本一本ひろく開いて、かたくなつて立っていました。ああ、その眼めと顔かほぜんたいとが、どんなに喜びかがやに輝かがやいていたことでしょう！

『あしたは、その着物をきて、おもてへ行つてもいいのよ』と、母親が言いました。女の

子は帽子を見上げたり、着物を見おろしたりしながら、嬉しうれしそうにほほえみました。  
『お母さん！』と、女の子は言いました。『あたしがこんなすてきな着物を着ているのを見たら、犬たちなんて思うかしら！』」

## 第十八夜

「わたしは」と、月が言いました。「きみにポンペーのことを話してあげたことがあります。あれはいきいきとした都市がたくさん並ならんでいる中で、さらしものにされている都市の死骸しがいです。けれどもわたしは、それよりもつと珍めずらしい、もう一つの都市を知っています。それは都市の死骸ではなくて、都市の幽霊ゆうれいです。

噴水ふんすいが大理石の水盤すいばんの中でぴちやぴちや音をたてているところではどこでも、わたしはその水に浮うかんでいる都市のおとぎばなしを聞いているような気がします。たしかに、噴水の水はそれを物語っているにちがいありません。打寄せる岸辺きしべの波はそれを歌っているにちがいありません。海のおもてには、しばしば霧きりがたちこめます。それは寡婦かふのベールです。海の花婿はなむこは死にました。その城とその都市とは、いまや御陵みさきぎとなつています。

きみはこの都市を知っていますか？ その通りには車のころがる音も、馬のひづめの音も聞えたことはありません。そこには魚が泳いでいて、黒いゴンドラが幽霊のように緑の

水の上を走って行きます。わたしは「と、月はなおも語りつづけました。「きみにその都市の中でいちばん大きな広場を見せてあげましょう。そうすれば、きみはまるでお伽とぎの都市に來たのかと思うでしょう。広い敷しき石いしのあいだには草はが生はえています。夜が明けはじめると、人なれた鳩はとが何千ともなく、離はなれて立たっている高い塔とうのまわりを飛びまわります。きみは三方からアーケードに取りかこまれています。そこには長いキセルをもったトルコ人がじつとすわっています。美しいギリシャの少年が円柱によりかかって、昔むかしの威いり力りよくを物語る戦勝記念標はたざおの高い旗はた竿ざおを見上げています。旗は喪も章しょうのように垂れさがっています。ひとりの娘むすめがそこで休んでいます。水のはいった重い桶おけを下に置いていました。桶をかついできた棒かたは肩かたの上うへにのせたまま、戦勝柱せんしょうちゆうに身みをもたせています。

いまきみの眼めの前まへに見えるのは妖よう精せいの城しろではなくて、教会かいういです。金めつきをした円屋まる根やねとそのままりの金の球たまごが、わたしの光ひかりを受けて、きらきらと輝かがやいています。その上のほうにあるりっぱな青銅せいどうの馬うまは、おとぎばなしの中の青銅せいどうの馬うまのように、旅たびをしてきました。はじめここへやってきて、それから行いってしまい、そうしてまた戻もどってきたのです。きみには壁かべや窓まどの色いろとりどりの美うつくしさが見みえますか？ まるで天才てんさいが子供こどもの言ことうなりになって、この珍しい寺院いんねんの装そう飾しよくをしたのではないかと思おもわれます。

きみにはあの円柱の上の翼のある獅子が見えますか？ 金はいまもかわらず光っていますが、翼はしばらくはいます。獅子は死んでいるのです。なぜならば、海の王が死んでいるからです。大きな会堂の中はからっぽです。むかし高価な絵がかかっていたところも、いまでは裸の壁がむきだしになっています。浮浪者がアーチの下で眠っています。かつては、この廊下には身分の高い貴族しか足を踏み入れることができなかつたものです。

深い井戸からか、それとも溜息の橋のそばの牢獄からか、一つの溜息が聞えてきます。そのむかしには、色あざやかなゴンドラの上でタンバリンの音がひびき、婚約の指輪が輝かしい総督の船ブーチントロから海の女王アドリアへ投げこまれたのです。アドリアよ、おまえの身を霧の中につつまなさい！ 寡婦のベールをもって、おまえの胸をおいなさい！ そしてそれを、おまえの花婿の御陵の上に、幽霊のような大理石の都ベネチアの上になきなさい！」

## 第十九夜

「わたしはある大きな劇場を見おろしました」と、月が言いました。「その劇場は見物人でいっぱいでした。というのは、新しい俳優が初舞台をふむことになっていたからです。わたしの光は壁にある小さな窓の上をすべって行きました。すると、化粧をした一つの顔がひたいを窓ガラスに押しつけていました。それがその晩の主人公だったのです。騎士らしいひげが、あごのまわりにちぢれていました。その男の眼には涙がたまっていました。それもそのはず、人々から口笛でののしられて、舞台を引き下がってきたばかりだったのです。もつとも、ののしられても仕方がありません。あわれな男です！ 才能のない者は芸術の世界では辛抱されるわけにはいかないのです。

この男は物事を深く感じもしましたし、感激をもって芸術を愛しました。けれども、芸術のほうではこの男を愛してくれませんでした。——舞台監督の鳴らすベルが鳴りひびきました。——大胆に勇氣凜然と主人公登場、と役割書には書いてありました。——この男は、いま自分をあざけり笑った見物人の前に出なければなりませんでした。——

この芝居しばいが終ったとき、わたしはひとりの男がマントにくるまって、階段をこつそり降りて行くのを見ました。それはほかならぬ、さんざんにやつつけられたその晩の騎士でした。道具方の男たちは、ひそひそ話しあっていました。わたしはこの罪人つみびとのあとについて、この男の家の部屋までのぼって行きました。

首をつるのは見ぐるしい死に方だ。そうかといって、毒薬はいつも手もとにありはしない。わたしはこの男がその両方のことを考えていたのを知っています。わたしはこの男が青白い顔を鏡にうつしてみて、それから眼を半ば閉じるのを見ました。こうして、死体と違ってからもきれいに見えるかどうかをためしているのです。人間は非常な不幸におちいつても、極度に見栄みえをはることはあるものです。この男は死を考えました。自殺を考えました。そして、自分自身のために泣いたように思います。——はげしく泣きました。人間は思いきり泣きつくしてしまうと、自殺などはしないものです。

そのときから、まる一年たちました。とある小さな劇場で、みじめな旅まわりの一座が喜劇を上演しました。わたしはふたたびあの見おぼえのある顔を、化粧した頬ほおとちぢれたひげとを見ました。この男はまたわたしを見上げて微笑びしょうしました。——けれども一分と

はたたないうちに、口笛でののしられて舞台から追いだされてきたのでした。みすぼらしい劇場で、なさない見物人のためにののしられてきたのです！

今夜、一台のみすぼらしい葬儀車そうぎしやが町の門から出て行きました。後あとにはひとりの人もついては行きませんでした。それは自殺者だったのです。口笛で舞台から追いだされた、あの化粧をしたわれわれの主人公だったのです。車を走らせている御者ぎよしやがただひとりそばにただで、ほかにはだれもついていませんでした。月のほかにはだれも。墓地へいの堀かたすみの近くの片隅かたすみに、自殺者は埋めうられました。そこには、やがていらくさがはびこることでしょう。墓掘りはかほの男はほかの墓から抜き取ぬったいばらや雑草を、そこに投げすてることでしょう」

## 第二十夜

「ローマから、わたしは来ました」と、月が言いました。「あの都のまん中にある七つの丘おかの一つに、皇帝宮こうていきゆうの廃墟はいきよがあります。野生のイチジクが壁かべの裂目さげめから生えでて、広い灰緑かいりよくしよく色の葉で壁の素肌すはだをおおっています。砂利じやりの積みかさなったあいだで、ろばが緑の月桂樹げっけいじゆの垣かきの上を歩いて、やせたアザミを喜んで食べています。かつては、ここからローマの鷲わしたちが飛び出して、『来た、見た、勝った』と言ったものです。それがいまでは、こわれた二つの大理石の円柱のあいだに粘土ねんどでこしらえた小さなみすぼらしい家を通つて、入口がついているのです。ブドウの蔓つるがかたむいた窓の上に、葬式そうしきの花輪

のようにまつわりさがっています。

ひとりの老婆ろうばが小さい孫まご娘むすめといつしよにそこに住んでいて、いまこの皇帝宮を支配しています。そしてよそから来る人たちに、ここに埋うもれている宝を見せているのです。りつばな玉座ぎよくぎの間まには、ただ裸はだかの壁が残っているだけで、黒い糸杉いとすぎがむかし玉座のあったところをその長い影かげでさし示しています。土がこわれた床ゆかの上に、うず高くつもつて

います。いまはこの皇帝宮の娘である小さい少女が、夕べの鐘の鳴りひびくころ、よくその低い小さな椅子に腰かけています。すぐそばにある扉の鍵穴を、この子は露台と呼んでいます。その穴からのぞくと、ローマの半分を、聖ペテロ寺院の大きな円屋根までも見わたすことができます。

今夜も、そこはいつものように静かでした。そして下のほうに、わたしの輝く光をいっぱいを受けて、この小さい少女が出てきました。頭の上には水のはいつた古代風の粘土のかめをのせていました。見ればはだしで、短いスカートも、小さいシュミーズの袖もきれ었습니다。わたしはその子の美しいまろい肩と、黒い眼と、まっ黒なつやつやした髪の毛にキスをしてやりました。少女は家の前の階段をのぼってきました。階段は急で、石壁のかけらやこわれた円柱頭などでできていました。

五色のトカゲがびっくりして少女の足もとを掛けて行きましたが、少女はすこしも驚きませんでした。そして早くも手をのばして、戸の呼びりんを鳴らそうとしました。ウサギの前足が一つ、紐にゆわえつけられてさがっていました。これがいまの皇帝宮の、呼びりんの引手なのです。

少女はちよつと手をとめました。何を考えたのでしょうか。きつと、あの下下の礼拝堂

にある、金と銀との着物をきた、美しい子供姿のイエスのことでも考えていたのでしょう。いま礼拝堂では、銀のランプが輝き、小さいお友だちがこの子もよく知っている歌をうたいはじめていました。でも、ほんとうに何を考えていたのか、わたしにはわかりません。

少女はまた動きました。そして、何かにつまづきました。粘土のかめが頭から落ちて、溝みぞの掘ほれている大理石の敷しき石いしの上で二つにくだけてしまいました。少女はわっと泣きだしました。皇帝宮の美しい娘は、みすぼらしいこわれた粘土のかめのために泣きました。はだしのままそこに立って、泣いていました。もう皇帝宮の呼びりんの引手の紐を引くだけの元気もありませんでした」

## 第二十一夜

二週間以上も月は出ませんでしたでしたが、いままたわたしは月を見ました。ゆるやかにのぼって行く雲の上に、月はまるく明るく輝かがやいていました。月がわたしに話してくれたことをお聞きください。

「アフリカのフェザン地方のある町から、わたしは隊商の後について行きました。砂漠さばくの手前にある岩塩平原の一つで、隊商は立ちどまりました。そこは氷の表面のようにきらきら光っていて、わずかのところだけ軽い流りゅう砂うしやでおおわれていました。いちばん年上の男は腰帯こしおびに水筒すいとんを下げ、頭のそばにはパン種のはいらないパンをいれた袋ふくろをもっていました。この男が杖つえで砂の上に正方形をえがいて、その中にコーランの中の言葉を二つ三つ書きました。隊商はみんな、この聖きよめられたところを通って進んで行きました。

太陽の子であるひとりの若い商人が、物思いにふけりながら、荒あらい鼻息をたてている白い馬に乗っていました。この男が太陽の子であることは、その眼めと美しい姿とで、わたしにはすぐわかりました。この男は美しい若い妻のことも考えていたのでしょうか？ 毛

皮と高価な肩掛けで飾られたラクダが、この男の妻を、美しい花嫁を乗せて、町の城壁のまわりを歩いたのは、たった二日前のことだったのです。太鼓や袋笛が鳴りわたりました。女たちは歌いました。そしてラクダのまわりには、喜びの砲声が鳴りひびきました。花婿はいちばんたくさん、いちばん強く鉄砲を打ちました。そしていまは——いまその男は、隊商といっしょに砂漠を通って行くのです。

わたしは幾晩も隊商の後について行きました。そして、発育の悪いシユロの木にかこまれた泉のほとりで、この人たちが休むのを見ました。人々は倒れたラクダの胸にナイフを突きさして、その肉を火であぶりしました。わたしの光は燃えている砂を冷やしました。またわたしの光は、大きな砂海の中の死んだ島ともいうべき黒い岩の塊りを人々に見せてやりました。この人たちは、人の通ったことのない道でも敵の種族に出会いませんでした。嵐も起りませんでした。旅行く人々を死にたやす砂柱も、この隊商の上にはまき起りませんでした。家では、美しい妻が夫や父のために祈っていました。

『あの人たちは死んだのでしょうか？』と、わたしの金色の半月にむかって、美しい妻はたずねました。『あの人たちは死んだのでしょうか？』と、わたしのこうこうと輝く月の輪にむかってたずねました。

いまはもう、砂漠は隊商の後になりました。今夜は高いシユロの木の下にすわっています。そこでは鶴が長い翼をひろげて飛びまわり、ペリカン鳥はミモザの枝から人々を見おろしています。生い茂った草藪が、象の重たい足に踏みつけられています。黒人の群れがずっと奥地にある市場から帰ってきます。黒い髪の毛のまわりに銅のボタンをつけて、あい色のスカートをはいた女たちが、重い荷をつんだ牡牛を追っています。その荷物の上には、裸の黒い子供が眠っています。ひとりの黒人は買ってきたライオンの子を綱で引ています。こうした人たちが隊商に近づいているのです。あの若い商人は身動き一つしないで、黙ってすわっています。心に思っているのは美しい妻のことです。この黒人の国にいながら、砂漠のかなたの匂い高い、まっ白な花のことを夢みているのです。商人は頭をあげます——！」そのとき、一つの雲が月をおおいました。それから、また一つの雲がかかりました。わたしはその晩はもう、それ以上何も聞きませんでした。

## 第二十二夜

「わたしは小さい女の子が泣いているのを見ました」と、月が言いました。「その子は世の中が意地悪いのを泣いていたのです。この女の子はとても美しいお人形をもらいました。それは、ほんとうにかわいい、きれいなお人形でした。もちろん、この世の中で不幸な目にあうように生れてきたわけではありません。ところが、この小さい女の子の兄さんの、大きい男の子たちがお人形をひったくって、庭の高い木の上にのせると、そのまま逃にげて行ってしまったのです。

小さい女の子はお人形のところまで行くこともできないし、お人形をおろしてやることもできません。それで、泣いていたのです。お人形もたしかにいつしよに泣いていました。りょううで両腕を緑の枝えだのあいだからのぼして、いかにも悲しそうなようすをしていましたもの。そうだわ、これがママのよくおつしやる世の中の災難でもものなんだわ。ああ、かわいそうなお人形！

あたりは、もう薄うすく暗くらくなりはじめました。もうじき夜になってしまいます。お人形は

今夜一晩じゆう、おもての木の上に、ひとりぽっちですわっていなければならぬのでしようか？ いやいや、そんなことは、女の子にとっては思ってみるだけでもたまらないことです。

『あたし、あんたのそばにいてあげるわね』と、女の子は言いました。といつても、そんな勇気があるわけではありません。早くも、高いとんがり帽子をかぶった小さい小人の妖魔が茂みの中からのぞいているのが、はつきり見えるような気がするのです。おまけに、向うの暗い道では、ひよろ長の幽霊が踊りをおどっていて、それがだんだんこつちへ近づいてくるではありませんか。そして両手をお人形のものっている木のほうへのぼして、笑ったり、指さしたりしているのです。ああ、小さい女の子はこわくてこわくてたまりません。

『でも、なんにも悪いことをしていなければ』と、女の子は考えてみました。『悪ものだって、なんにもすることなんかできやしないわ。でもあたし、何か悪いことしたかしら？』  
そうして、いろいろと思いだしているうちに、

『ああ、そうだっけ』と、女の子は言いました。『あたし、足に赤いきれをつけてた、かわいそうなアヒルを笑ったことがあったわ。あんなおかしなかつこうをして足をひきずる

んですもの、あたし笑っちゃったんだわ。だけど、生き物を笑うなんていけないことだね』こう言いながら、女の子はお人形のほうを見上げました。

『あんた、生き物を笑ったことがある？』と、ききました。すると、お人形は頭を振ふったように見えました」

## 第二十三夜

「わたしはチロルを見おろしました」と、月は話しました。「わたしは黒々としたもみの木に、くつきりとした長い影かげを岩の上へ投げかけさせました。わたしは幼子おきなごイエスを肩かたにのせた聖クリストファの画像をながめました。その絵は、このあたりの家々の壁かべに地面から屋根まで届くくらい、大きくかいてありました。聖フロリアンは燃えあがっている家に水をそそいでいました。キリストは血まみれになって、道ばたの十字架じゅうじかにかかっています。これは新しい時代の人々にとつては古い画像です。でもわたしは、それらが建てられるのを見てきました。一つ、また一つと、建てられるのを見てきたのです。

山腹の高いところに、ちようどツバメの巢すのように、尼僧院にそういんが一つぽつんと立っています。ふたりの姉妹しまいが上の塔とうの中に立って、鐘かねを鳴らしていました。ふたりともまだ年若く、そのためふたりの眼めは山々をこえて、はるかかなたの世間のほうへ飛んで行きました。旅行馬車が一台、下の国道を走っていました。馬車の角つのふえ笛が鳴りわたりました。すると、あわれな尼僧たちは同じ思いにかられて、眼を下馬車にじつとそそぎました。若い妹の

眼には涙がたまっていました。——やがて、角笛のひびきはだんだん弱くなっていきま  
た。そしてそのたえだえの音を、尼僧院の鐘がかき消してしまいました。——」

## 第二十四夜

月が話したことを聞いてください。

「いまからもう何年も前のことです。このコペンハーゲンで、わたしはあるみすぼらしい部屋の中を窓ごしにのぞきこんだことがあります。父親と母親は眠っていましたが、小さい息子はまだ眠ってはいませんでした。そのとき、寝台のまわりの花模様についているサラサのカーテンが動いて、そこから子供の顔が外をのぞくのが見えました。

わたしは最初、その子はボルンホルム製の部屋時計を見ているんだろうと思いました。その時計は赤や緑でたいへんきれいに塗ってありました。そして上にはカツコウがとまっています、下には重い鉛のおもりが垂れ下がっていました。ぴかぴか光るしんちゅう板の振り子があつちこつちに揺れ動いて、コットン、コットンいっていました。

ところが、その子が見ていたのはこの時計ではありませんでした。そうです、この子が見ていたのは、母親の紡車だつたのです。それは時計の真下に置いてありました。その紡車こそ、この子が家じゅうで一番好きなものだつたのです。でも、それにさわるこ

はできません。なぜって、ちよつとでもさわろうものなら、すぐに指先をぱんとたたかれ  
るのですから。でも、母親が糸をつむいでいる間じゆう、この子はいつまでもそこにすわ  
って、ぶんぶんいう紡錘つむむと、ぐるぐるまわる車とをながめているのでした。そしてそれを  
ながめながら、自分だけの思いにふけるのです。ああ、ぼくにもこの紡車つむぐでつむぐこと  
ができたらなあ！

父親も母親も眠っていました。男の子はふたりのほうを見ました。そして紡車をながめ  
ました。それからすぐに、かわいらしい素足すあしが一つ寢床ねじこから出てきました。またもう一つ  
が出てきました。こうして小さな脚あしが二本現われました。コトリ！ 男の子は床ゆかの上に立  
ちました。男の子はもう一度振り向いて、父親と母親が眠っているかどうかをたしかめま  
した。たしかに、ふたりとも眠っています。そこで、小さな短い寝巻のまま、ぬき足さし  
足こつそりと紡車のところへしのびよって、つむぎはじめました。糸は紡錘ぼうすいから飛び、車  
はずばらしい早さでまわりました。

わたしはその子のブロンドの髪かみの毛と水色の眼めにキスをしてやりました。それはほんと  
にかわいらしい光景でした。そのとき、母親が眼をさしました。カーテンが動いて、母  
親が外をのぞきました。そして、小人の妖精ようせいか、さもなければ、ほかの小さな精霊せいれいが

来ているのではないかと思いました。

『あらまあ！』母親はこう言いながら、こわごわ夫の脇腹をつつきました。父親は眼をあげると、手でこすりこすり、一心に働いている小さい少年のほうをながめました。

『あれはベルテルじゃないか』と、父親は言いました。

それから、わたしの眼はそのみすぼらしい部屋を後にして、べつのところへ向いました。なぜなら、わたしはとても広いところを見まわしているのですから。その同じ瞬間に、わたしは大理石の神々が立っているバチカン宮の広間を見ました。わたしはラオコーンの群像を照らしました。すると、石が溜息をするように思われました。わたしは美の女神ミューズの胸に、そつとキスをしました。すると、その胸が高まるような気がしました。

けれども、わたしの光はナイルの群像のところに、あの巨大な神のところに、いちばん長くとどまっていました。その巨大な神はスフィンクスに身をもたせて、まるで移り行く年月のことを考えてでもいるかのように、物思いにせずんで、夢みるように横たわっていました。小さい愛の神のアモールたちは、そのまわりでワニとたわむれていました。豊饒の角の中にはごく小さいアモールがひとり、腕を組んですわっていました。そして、

おごそかな顔をした大きな河の神を見ました。このアモールは、あの紡車のそばにいた小さい男の子にそっくりの姿をしていました。顔かたちもおんなじでした。

ここには、小さな大理石の子供がまるで生きているように、かわいらしく立っています。けれどもその子が大理石の中からとびだして以来、年の車はもう千回以上もまわっているのです。あのみすぼらしい部屋の中の男の子が紡車をまわしたと同じ数だけ、もっと大きな年の車もぶんぶんまわったのです。そしてこの世紀が、このような大理石の神々をつくりだす日まで、さらにさらにまわりつづけていくのです。

いいですね、これはみんな幾年も前のことですよ。とろできのう」と、月は語りつづけました。「わたしはシエラン島の東海岸にある、どこかの入江を見おろしていました。そこには美しい森や、小高い丘や、赤い壁をめぐらした古いお屋敷などがあって、外堀には白鳥が泳いでいます。そして、りんご園のあいだに教会の立っている小さな田舎町があります。

たくさんの小舟が、それぞれたいまつをつけて、静かな水のおもてをすべって行ききました。しかし、たいまつをつけていたからといって、それはウナギを捕るためではありません。いや、それどころか、あたりのようすからしてお祭のようでした！

音楽が鳴りひびき、歌がうたわれました。一そうの小舟のまん中には、今夜みんなが敬意を表わしている人が立っていました。それは大きなマントにくるまった、背の高い、がつしりした男で、青い眼と長い白い髪の毛を持っていました。わたしはこの人を知っていません。そしてすぐさまわたしは、ナイルの群像やあらゆる大理石の神々のあるバチカン宮のことを思い浮べました。それといっしょに、あの小さなみすぼらしい部屋のことも思い出しました。あの小さいベルテルが短い寝巻のまますわって、糸をつむいでいたのは、たしかグレンネ街だったと思います。時の車はぐるぐるまわりました。新しい神々が、大理石の中から立ちあがったのです。——小舟の中から、ばんざいの声がひびきました。

『ベルテル・トルワルセンばんざい！』——

## 第二十五夜

「わたしはきみにフランクフルトの、ある光景を話してあげましょう」と、月が言いました。「わたしはそこで特に一つの建物をながめました。といつても、それはゲーテの生れた家でもなく、古い議事堂でもありません。その議事堂の格子窓からは、そのむかし皇帝の戴冠式うてい たいかんしきのときにあぶり肉にされて、人々のご馳走ちそうにされた、角のついたままの牡牛おの頭蓋骨うし づがいこつが、いまもお突きでているのですが、しかし、わたしがながめていたのはそんなものではなくて、せまいユダヤ人街まちの入口の角かどのところにある、緑色に塗ぬられた、みすばらしい平民の家だったのです。それはロスチャイルドの家でした。

わたしは開いている戸口から中をのぞいてみました。階段のところには、あかあかと明りがついていました。そこには下男たちが重そうな銀の燭しよくだい台たいに火のともっているろうそくを持って、立っていました。そして、轎かごに乗ったまま階段を運ばれてきた、ひとりの年とつた婦人に向つて、ていねいにおじぎをしました。この家の主人は帽子ぼうしもかぶらず立っていて、この老婦人の手にうやうやしくキスをしました。

老婦人はこの人の母親だったのです。老婦人は息子と召使たちに親しげにうなずいてみせました。それから、人々は老婦人を狭い暗い小路の中の、とある小さな家へ運んで行きました。そこにこの老婦人は住んでいました。そこで子供たちを生んだのです。そしてそこから、子供たちの幸福が花のように咲きいでたのです。もしもいま、わたしが人からいやしまれているこの小路と小さい家とを見捨てたなら、幸福もまた息子たちを見捨てるだろう、というのが、この老婦人の信念だったのです。――」

月はこれ以上話してくれませんでした。今夜の月の訪れはあまりに短いものでした。しかしわたしは、人からいやしまれているその狭い小路に住む年とった婦人のことを考えてみました。このひとがたつたひとと言いさえすれば、テムズ河のほとりに光りかがやく家が立つのです。たつたひとと言いさえすれば、ナポリの入江近くに別荘が立つのです。

『もしもわたしが、息子たちの幸福が咲きいでたこの小さい家を見捨てたなら、幸福も息子たちを見捨てるだろう！』――それは迷信です。でもそれは、人がこの話を知り、その絵を見るときに、それを理解するためには、「母親」という二つの文字をその下に書いておきさえすればいいといった類いの迷信です。



## 第二十六夜

「きのうの夜明けのことでした」これは月自身が言った言葉です。「大きな町の煙突は、まだどれも煙をはいっていませんでした。それでもわたしが見ていたのは、その煙突だったのです。と、とつぜん、その煙突の一つから、小さい頭が出てきました。つづいて上半身が現われて、両腕を煙突のふちにかけました。

『ばんざい！』それは小さい煙突そうじの小僧でした。生れてはじめて煙突の中をてっぺんまでのぼってきて、頭を外につき出したのでした。

『ばんざい！』そうです、そのとおりです。たしかにこれは、狭苦しい管や小さい燂炉の中を這いずりまわるのとは、いささかわけが違っていました。そよ風がすがすがしく吹いていました。町じゆうが緑の森のあたりまで見わたせました。ちようど太陽がのぼりました。まるく大きく、太陽は小僧の顔を照らしました。その顔はじつにみごとに煤でまっ黒になっていましたが、嬉しさがかがやいていました。

『さあ、おいらは、町じゆうのものに見えるんだ！』と、小僧は言いました。『お月さま

にだって、おいらが見えるんだ。お日さまにだってよ！ ばんざい！』  
こう言いながら、  
小僧はほうきを打振りうちふました」

## 第二十七夜

「ゆうべ、わたしは中国のある町を見おろしました」と、月が言いました。「わたしの光は街路をつくっている、長いはだかの土塀どべいを照らしました。あちこちに門がありました、どれもしまっていました。なぜかといいますと、中国人は外の世界のことなんか、ちつとも気にとめていないからです。厚いよろい戸が、家の土塀のうしろの窓をおおっています。ただお寺だけから、弱い光が窓ガラスをとおしてかすかに射さしていました。

わたしは中をのぞいてみました。すると、色とりどりの華はなやかさが眼めにうつりました。床ゆかから天てん井じょうまで、まばゆいほどの色しき彩さいと金めつきをほどこした絵がかかっています。それはこの下界における仏たちの所業をえがいたものでした。一つ一つの厨子ずしの中には仏像が立っていました、色どりゆたかな幕や垂れ下がった旗のためにほとんど隠かくれていました。そしてどの仏の前にも——それはみんな錫すずでつくってあります——小さい祭さいだ壇だんがあつて、そこには聖きよい水と、花と、火のともっているろうそくとがありました。けれどもお寺の中のいちばん高いところには、最高の御み仏ほとけである仏陀ぶつだが聖なる絹こういの黄衣こういを

身にまどつて立つていました。

祭壇の足もとに、ひとりの生きた人間の姿が、ひとりの若い僧侶そうりよが、すわってしました。この僧侶は祈いのっているようすでしたが、そのお祈りのさいちゆうに何か物思いにしないでいるようでした。それは、たしかに一つの罪でした。というのは、その頬ほおは熱くほてり、頭は深く深く垂れ下がっていたからです！ あわれなスイ・ホン！

この男は街の長い土塀のうしろの、どの家の前にもある小さい花壇で働く自分の姿でも夢ゆめみていたものでしょうか。そしてその仕事のほうが、お寺の中でろうそくの番をするよりも、ずっと好きだったのではないのでしょうか。それとも、ご馳走ちせうのたくさん並ならんでいる食卓しょくたくについて、一皿さらごとに銀の紙で口もとをふきたいものだと思いでいたのでしょうか。それともまた、この男の罪が非常に大きなもので、もしもそれを口にでもしようものなら、極楽ごくらくが死の刑けいをもつてこの男を罰ばつしなければならぬといったようなものだったのでしょうか。あるいはまた、その思いは野蠻人やばんじんの船とともにその故郷の、はるかにへだたったイギリスへでも飛んで行ったのでしょうか。いやいや、この男の思いはそんなに遠くまで飛びはしませんでした。けれどもそれは、熱い青春の血だけが産みだすことのできるような罪深いものでした。このお寺の中の仏陀をはじめ多くの仏像の前では罪深いも

のだったのです。

わたしは、この男の思いがどこにあつたかを知っています。この町のはずれの、平たい敷石しきいしをしいた屋根の上に——その欄干らんかんは瀬戸物せとものでできているように見えます——白い大きな風鈴草ふうりんそうをさした、きれいな花瓶かびんが置いてありましたが、そのそばに美しいペーが、細いいたずらっぽいやと、ふくよかな唇くちびると、それは小さな足をしてすわっていました。靴くつのために足はしめつけられていましたが、心はもつともつと強くしめつけられているのでした。娘むすめがきやしやな美しい腕うでを上げますと、しゅすがさらさらと音をたてました。

娘の前にはガラス鉢ばちが置いてあつて、金魚が四ひきはいつていました。娘はうるしをぬつた、色どり美しい箸はしで、水の中をそつとかきまわしていました。何か物思いにせずんできましたので、ほんとうに、ほんとうにゆつくりとかきまわしていました。ああ、金魚はなんて豊かな金色の着物を着ているのだろう、そしてガラス鉢の中でなんてのどかに暮くらしながら、たくさんの餌えをもらっているのだろう、でも、もしも自由になれたら、そしたらどんなに幸福だろう、と、きつとこんなことを思っていたのでしよう。ほんとうに、この美しいペーにはそれがよくわかつていたのです。ペーの思いは家からさまよいでました。そしてお寺へと向いました。けれどもそれは、仏のためではありません。あわれなペー！

あわれなスイ・ホン！ 現世でのふたりの思いは、めぐりあいました。しかしわたしの冷たい光は、大天使の剣つるぎのように、このふたりのあいだに横たわっていました！——

## 第二十八夜

「海は凪いでいました」と、月が言いました。「水は、わたしが帆走っていた澄みきった空気のようになり、透きとおっていました。わたしは海面よりもずっと下に生えている珍しい植物を見ることができました。それらは森の中の巨木のようになり、幾尋もある茎をわたしのほうへさし上げていました。魚がその頂の上を泳いで行きました。」

空高く野の白鳥の群れが飛んでいました。その中の一羽は翼の力がおとろえて、だんだん下へ沈んで行きました。その眼はしだいに遠ざかって行く空の旅行隊の後を追っていましたが、翼をひろくひろげて、ちょうどしゃぼん玉が静かな空気の中を沈んで行くように、沈んで行きました。やがて水面に触れました。頭をそらして翼のあいだにつっこむと、おだやかな湖に浮ぶ白い蓮の花のように、静かに横たわっていました。

やがて風が吹いてきて、きらきら輝く水のおもてに波をたたせました。すると、水のおもては、まるでエーテルのようにきらめいて、大きな広い波となつてうねりました。そのとき、白鳥が頭を上げました。きらきら光る水が、青い火のように白鳥の胸や背を洗つて

飛び散りました。<sup>あかつき</sup>暁の光が赤い雲を照らしました。白鳥は元氣を取り戻して立ち上がると、のぼりくる太陽のほうへ、空の旅行隊の飛び去った青みがかった岸<sup>きし</sup>辺をめぐりながら飛んで行きました。ただひとり胸に憧<sup>あこが</sup>れをいだいて飛んで行きました。青い、ふくれあがる波をこえて、ひとりさびしく飛んで行きました」――

## 第二十九夜

「きみにスウェーデンの光景をもう一つ話してあげましょう」と、月が言いました。「薄<sup>う</sup>すく<sup>ら</sup>暗いもみの木の森のあいだ、ロクセン湖の陰<sup>いん</sup>気な岸<sup>き</sup>辺近くに、古いブレタの僧<sup>そう</sup>院<sup>いん</sup>があります。わたしの光は壁<sup>かべ</sup>の格子<sup>こうし</sup>をとおつて、広い円<sup>まる</sup>天井<sup>てんじょう</sup>の部屋へすべりこんで行きました。その部屋では、王たちが大きな石の棺<sup>ひつぎ</sup>の中でまどろんでいるのです。その棺の上の壁には、この世における榮<sup>えい</sup>華<sup>が</sup>をあらわすもののように、一つの王<sup>おう</sup>冠<sup>かん</sup>が人目をひいています。けれども、それは木でこしらえてあつて、それに色<sup>しき</sup>彩<sup>さい</sup>をほどこし、金めつきをしました。ものなのです。そしてそれは、壁に打ちこまれた一本の木<sup>きく</sup>釘<sup>ぎ</sup>で、しっかりとめられています。その金めつきをした木は虫に食いあらされています。クモが王冠から棺<sup>ひつぎ</sup>まで網<sup>あみ</sup>を張りめぐらしています。これは、人間の悲しみと同じように、はかない喪<sup>も</sup>章<sup>しょう</sup>の旗<sup>はた</sup>です！

王たちは、なんて静かにまどろんでいるのでしょうか！

わたしはあの人たちのことをはつきりと覚えていきます！ あんなにも力強く、あんなにも決然と喜びや悲しみを語った、口もとにただよう大<sup>だい</sup>胆<sup>たん</sup>な微<sup>び</sup>笑<sup>しょう</sup>が、いまもなお眼<sup>め</sup>に浮<sup>う</sup>か

んできます。蒸気船が魔法まほうのかたつむりのように山々のあいだをぬってきますと、ときおり旅人が会堂へやってきます。そしてこの円天井のお墓の部屋おとすを訪れて、王たちの名前をたずねます。でもその人の耳には、王たちの名前は忘れられたもの、死んだものとしてひびくのです。その人は虫の食った王冠を見上げてほほえみます。そしてその人が本当に敬け虔いけんな心の持主であれば、そのほほえみの中には哀あい愁しゆうの色がただよいます。まどろみなさい、死者たちよ！ 月はきみたちのことを覚えています。月は夜、もみの木の王冠のかかっている、きみたちの静かな王国へ、冷やかな光を送ってあげます！——」

## 第三十夜

「国道のすぐそばに」と、月が話しました。「一軒の旅館があります。そしてその真向  
 いに、大きな馬車小屋があります。小屋の屋根はちようど葺いたばかりでした。わたしは  
 桝のあいだと開いている天井窓から、そのうす気味悪い小屋の中をのぞいてみました。  
 七面鳥が梁の上で眠っていました。鞍はからつぽの秣桶の中に入れて、休まされてい  
 ました。

小屋のまん中には、旅行馬車が一台置いてありました。その持主はまだぐつすりと寝こ  
 んでいましたが、馬はもう水を飲まされていました。御者は道のりの半分以上もよく眠  
 ってきたのに、——それはわたしがいちばんよく知っています——まだ手足をのぼして  
 いました。下男部屋への戸は開いていましたが、寝床はまるでひつくり返されたかと思わ  
 れるようなありさまでした。ろうそくは床の上に置いてあって、燭台の中に深く燃え  
 落ちていました。

風が冷たく小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近

いころでした。向うの馬屋の床の上には、旅まわりの音楽師の一家が眠っていました。たぶん、父親と母親は瓶びんの中の燃えつくような雫しずくを夢ゆめにみていたものでしょう。青白い小さな女の子は眼めの中の燃えるような雫を夢にみていました。豎たて琴ことは頭のそばに置いてあり、犬は足もとに横たわっていました。――」

## 第三十一夜

「ある小さい田舎町いなかまちでのことでした」と、月が言いました。「わたしはそれを去年見ました。しかし、まあ、そんなことはどうでもいいのです。ともかく、わたしははつきりと見たのです。今夜わたしはそのことを新聞で読みましたが、これはそんなにはつきりとはしていませんでした。

宿屋の下の部屋に熊くまつか使いがすわって、夕飯を食べていました。熊は家の外のまき小屋のうしろにつながっていました。このあわれな熊は、見るからに恐ろおそしそうなようすをしていましたが、まだ一度も人に害を加えたことはありませんでした。上の屋根裏部屋では、わたしの明るい光を受けて、三人の小さい子供が遊んでいました。いちばん上の子はせいぜい六つぐらいで、いちばん下の子は二つをこしてはいませんでした。

『ボタン、ボタン』と階段を上ってくるものがありました。いったい、だれでしょう？ 戸がガタンと開きました——それは熊でした。あの大きな、毛むくじやらの熊ではありませんか！ 熊は下の中庭に立っているのがたいくつになつたのです。そして、階段を上る

道を見つけたのでした。わたしはそれをのこらず見ていました！」と、月が言いました。

「子供たちはこの大きな毛むくじやらの動物を見るとびっくりぎょうてんして、めいめい隅すみつこへ這はいこみました。けれども、熊は三人ともみんな見つけてしまいました。そうして鼻でくんくん嗅かぎまわりました。でも、べつに悪いことはなんにもしませんでした。

『これはきつと大きい犬だ』子供たちはそう思ったものですから、熊をなでてやりました。熊はごろりと床ゆかの上に横になりました。いちばん小さい男の子はその上をころげまわって遊びました。その子のちぢれた金きん髪ぱつの頭は、熊の濃こい黒い毛皮の中にかくれました。こんどは、いちばん大きい子が太鼓たいこを持ちだして、ドンドンたたきました。すると、熊は二本の後あと足あしで立ちあがって、踊おどりだしました。それはほんとおもしろいありさまでした！

子供たちは、めいめい鉄砲てつぱうをかつぎました。熊も一つもらいました。そして、それをちやんとかつぎました。これは、子供たちの見つけたすばらしい仲間です！ それからみんなは、『一、二、一、二！』と行進しました。

そのとき、戸に手をかけたものがありました。戸が開きました。それは子供たちの母親でした。その瞬しゆん間かんの母親のようすといったら、まったく、きみに見せてあげたいもの

でした。物も言えない驚き、石灰のような青白い顔、半ば開いた口、じつと見すえた眼、そうしたようすはほんとにきみに見せてあげたいものでした。ところがいちばん小さい男の子は、心から嬉しそうにうなずいてみせました。そして、この子なりの言葉で大声に叫びました。

『ぼくたち、兵隊ごっこちているだけよ！』

そこへ熊使いがやってきました」

## 第三十二夜

寒い風がびゅうびゅう吹いていました。雲が飛び去って行きました。月はただときおり見えるだけでした。

「静かな大空をとおして、わたしは飛び行く雲を見おろしています」と、月は言いました。「大きな影が地上を走って行くのが見えます。

このあいだ、わたしは牢獄の建物を見おろしました。窓をしめた一台の馬車が、その前にとまりました。ひとりの囚人が連れだされることになっていたのです。わたしの光は格子のはまっている窓から壁のところまで押し入って行きました。囚人はこの世の別れに、何か二、三行壁にきざみつけました。しかしこの男の書いたのは言葉ではありません。一つのメロデーでした。この場所ですごした最後の夜に、心の底からほとぼり出た一つのメロデーだったのです。戸が開きました。囚人は外へ連れだされました。そのとき、わたしのまるい月の輪をふりあおぎました。――

雲がわたしたちのあいだを走りました。まるで、わたしがこの男の顔を見てはならない

ように、そしてまた、この男がわたしの顔を見てはならないとでもいうかのようでした。男は馬車に乗りました。馬車の戸がしめられました。むちがヒューツと鳴りました。馬はこもりとした森の中へ駆けこんで行きました。そこでは、わたしの光は後を追って行くことができません。けれども、わたしは牢獄の格子の中をのぞいてみました。わたしの光は、あの男の最後の別れである、壁にきざまれたメロデーの上をすべって行きました。言葉の力の及ばないところでは、音の調べがものを言うものです。――

しかし、ただきれぎれの音譜しか、わたしの光は照らすことができませんでした。その大部分は、わたしにとつてはいつまでも暗闇の中に残されることでしょう。あの男の書いたのは死の讃歌だったのでしょうか？ 喜びの歓声だったのでしょうか？ あの男は死のもとへ行つたのでしょうか、それとも、愛人に抱かれるために行つたのでしょうか？ 月の光は人間が書くものをさえ、ことごとく読んでいるわけではありません。

ひろびろとした大空をとおして、わたしは飛び行く雲を見おろしています。大きな影が地上を走って行くのが見えます！」

## 第三十三夜

「わたしは子供が大好きです」と、月が言いました。「小さい子は、ことにおもしろいものです。子供たちがわたしのことなんかちつとも考えていないときにも、わたしはカーテンや窓わくのあいだから、たびたび部屋の中をのぞいています。子供たちがひとりで、やつとこ着物をぬごうとしているのを見るのはとっても愉快です。最初に、裸の小さいまるい肩かたが着物の中から出てきて、そのつぎに腕うでがするつと抜けぬでてきます。それから、靴くつし下たを脱ぬぐところも見ます。白くて固い、かわいらしい小さな脚あしが現われてきます。ほんとうにキスをしてやりたいような足です。そしてわたしは、ほんとうにその足にキスをしてやるのです！」と、月が言いました。

「今夜わたしは、どうしてもこのことを話さずにはいられません。今夜わたしは、一つの窓をのぞきこみました。向い側に家がないので、その窓にはカーテンがおろしてありませんでした。そこには子供たちが、姉妹しまいや兄弟たちがみんな集まっているのが見えました。その中にひとりの小さい女の子がいました。この子はやつと四つになったばかりでしたが、

それでもほかの子供たちと同じように、『主の祈り』をとなえることができず。そのため母親は、毎晩その子の寢床のそばにすわって、その子が『主の祈り』をとなえるのを聞いてやるのでした。そのあとで、その子はキスをもらうのです。そして母親はその子が眠りつくまで、そばにいてやります。でも小さい眼は閉じたかとおもうと、すぐに眠ってしまいます。

今夜は、上のふたりの子がすこしあばれていました。ひとりには長い白い寝巻を着て、片足でピョンピョン跳ねまわりました。もうひとりには、ほかの子供たちの着物をみんな自分のからだに巻きつけて、椅子の上に立ちあがり、ぼくは活人画だぞ、みんなであててみる、と言いました。三番目と四番目の子は、おもちゃをきちんと引出しの中へ入れました。もつともこれは、そうしなくてはいけないことですけども。母親はいちばん小さい子の寢床のそばにすわって、いまこの小さい子が『主の祈り』をとなえるから、みんな静かになさい、と言いました。

わたしはランプごしにのぞきこんでいました」と、月が言いました。「四つになる女の子は寢床の中で、白いきれいなシーツの中に寝ていました。そして小さい両手を合せて、たいそうまじめくさった顔をしていました。いましも『主の祈り』を声高にとなえてい

るところだったのです。

『あら、それは何なの？』母親はこう言つて、お祈りの途中とちゆうでさえぎりしました。『おまえはきょうもわれらに日々のパンを与あたえたまえと言つてから、ほかにも何か言つたのね。

お母さんにはよく聞かえなかつたけど、それは何？ お母さんに言つてごらんさい！』――すると、女の子は黙だまつたまま、困りきつた顔をして母親を見していました。

『きょうもわれらに日々のパンを与あたえたまえと言つたあとで、おまえはなんて言つたの？』  
『お母さん、怒おこらないでね』と、小さな女の子は言いました。『あかし、お祈りしたのよ。パンにバターもたくさんつけてくださいまし、つてね！』――

## 解説

矢崎源九郎

アンデルセンといえ、おそらくその名を知らない者はないといつてもよいであろう。ことに童話詩人としての彼のかれの名前は、われわれにとつてはなつかしい響きを持つてゐるのである。しかし彼は単に童話を書いたばかりではない。小説に戯曲ぎきよくに詩に旅行記に、じつに多方面にわたつて筆をふるつてゐる。なかんづく、イタリヤの美しい自然を背景として美少年アントーニオと歌姫うたひめアヌンチアータとの悲恋ひれんを描いた『即興詩人』のごときは忘れがたい作品の一つであるといえよう。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen ——われわれはいつのままにかアンデルセンと呼びなれてゐるが、これはわが国独特の呼び方であろう。いつたいに外国の発音をカナで書き表わすことは不可能であるが、デンマーク流の発音はアナスン、アネルセンに近い——は一八〇五年四月二日に豊かな伝説と古い民謡みんようとに恵まれてゐる

デンマークのオーデンセという町に生れた。生れ故郷のオーデンセは、ブナの木の林のあいだに麦やウマゴヤシの畑がかぎりなく続いているフーン島という美しい緑の島にあった。父は貧しい靴職人であつたが、折にふれて幼いアンデルセンにおとぎばなしや物語などを読んで聞かせた。文学への興味はこのころの父の感化によつて芽生えたといつてもよい。母は働く一方の女で学問はなかつたが、深い信仰心を持つていた。このふたりのもとに、幼いころはともかくも幸せな日々を送ることができたのである。しかし、十一歳のときに父を失うに及んで、この幸福の夢もはかなく消え去つてしまつた。母は仕立屋の職人にしたという希望を持つていたが、アンデルセンみずからは舞台上に立つことを望んで、十四歳のときただひとり首都のコペンハーゲンをめざして旅立つた。このときから彼にとつて新しい世界が開かれるとともに、茨の道がはじまつたのである。すなわち都に出るには出たものの、何もかもが彼の希望に反してしまつた。俳優として舞台上立つこともかなえられず、持つて生れた美声を頼りに志望した声楽家にもなることができないままに、いくどか絶望のどん底におちいつた。しかし幸いなことにも、一生の恩人であるコリンに見いだされたのはこのような失意のときであつた。それまでは学校教育もろくに受けておらず、物を書くのにも綴りがまちがいだらけというありさまであつたが、このコリンの助

力のおかげで学校へも行けるようになったのである。

アンデルセンは一生のあいだ旅から旅へとさすらって歩いた。旅こそは彼から切り離すことのできないものであった。一八三一年に初めて国外への旅行を行い、つづいて一八三三年にはドイツ、フランスをへてイタリアへの旅にのぼった。このときの旅行のあいだに、その印象をもととして書いたのが『即興詩人 Improvisatoren』（一八三五年）であって、この作によって初めて彼の名は国の内外に認められるようになった。『ただのバイオリン弾き Kun en Spilmand』とか、( )に訳出した『絵のない絵本 Billedbog uden Billeder』や、『スウェーデンにて I Sverige』、『わが生涯の物語 Mit Livs Eventyr』をはじめ、彼のほとんどすべての作品はこのとき以後のものである。童話についても同様、『即興詩人』が出版されてから二、三カ月後にはじめて第一集が出、それから一八七五年八月四日に永眠するまでに百五、六十にも及ぶ多数の童話が書かれたのである。

『絵のない絵本』は、一八三九年から四〇年ごろを中心にアンデルセンの創作意欲の最も盛んなときに書かれたものである。初めて本になったのは一八三九年十二月二十日で、(表紙の日付は一八四〇年となっている)そのときはわずかに二十夜を含むごく小さい本であった。この二十夜のうち五編はすでに一八三六年に文学誌『イリス(虹の女神)』第

二号上に発表されている。たとえば同誌に掲載けいさいされている『フランス国の玉座の上の貧しい男の子』というのは第五夜の物語である。一八四〇年にはさらに数夜が発表されたが、一八四四年の第二版においてようやく三十一夜を包ほうかつ括するにいたった。第三十二夜と第三十三夜は一八四八年に初めて公おおやけにされたものである。したがって一冊のまとまった本として現在のようにならぬ三十三夜全部を含んだのは、一八五四年に発行された第三版が最初である。初版から三版までに多くの歳月が流れているのは、この本がデンマークにおいてはあまり問題にされなかつたためであろう。つまり、この本も『即興詩人』の場合と同様、本国におけるよりもむしろドイツや英国などにおいて評判となつたのである。

『絵のない絵本』はこのように小さいにもかかわらず、きわめて多彩たさいな素材を含んでいる。その大部分がアンデルセンみずからの体験や印象にもとづいていることはいうまでもない。すなわち、第五夜は一八三三年のパリ滞たいざい在中の体験から、第六夜は一八三七年のスウェーデン旅行の印象をもととして書かれたものである。第十五夜のリュネブルク、第二十五夜のフランクフルトには一八三三、四年に訪おもとずれている。一八三三年から三四年にかけてのイタリア旅行の印象は第十二夜、第十八夜、第二十夜などにあらわれている。なかでも、暗い北ほくおう欧生れのアンデルセンがあこがれてやまなかつた明るい南の国イタリアは、この

本においても最も多く描かれて<sup>えが</sup>いるのである。

また一方においては空想の翼<sup>つばさ</sup>に乗<sup>は</sup>つて、遠くインドをはじめ、グリーンランドやアフリカ、中国にまでも思いを馳<sup>は</sup>せている。それらは第一夜、第九夜、第二十一夜、第二十七夜となつてあらわれている。そのほか子供についての話は六つほどあるが、それを描くのにあたたかい優<sup>やさ</sup>しい感情をもつて、しかも明るいユーモアを忘れていないところはいかにも童話詩人らしい。さらにまた諧<sup>かいぎやく</sup>諺<sup>げん</sup>にあふれたもの、あるいは苦惱<sup>くのおう</sup>にみちたものもあり、人生の一断面のスケッチもある。小さい本ながら、まことに盛り<sup>も</sup>りだくさんである。しかもこの本は、月が絵かきに物語<sup>ものがたり</sup>の話という形を取<sup>と</sup>つてはいるものの、その特<sup>とく</sup>徴<sup>ちゆう</sup>とするとところは絵画の素材<sup>そざい</sup>を与<sup>あた</sup>えるための、眼<sup>め</sup>まぐるしいばかりの場面の展開にあるのではない。一つ一つの短い物語の底に流れる、絵を絶<sup>と</sup>した浪<sup>なみ</sup>漫<sup>まん</sup>的<sup>てき</sup>香<sup>か</sup>りも高<sup>たか</sup>い詩情こそその生命<sup>せいめい</sup>なのである。

翻訳<sup>ほんやく</sup>のテキストとしてはコペンハーゲンの Gyldendal 書店から一九四三年に発行される H.C. Andersens Romaner og Rejseksildringer (小説、旅行記集) の第四巻に収められている Billedbog uden Billeder を用いた。ただ、年少の読者にも読みやすいように、改行

を多くしたことを一言おことわりしておく。

(一九五二年六月二十六日)

# 青空文庫情報

底本：「絵のない絵本」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年8月15日発行

1987（昭和62）年12月5日66刷改版

2005（平成17）年8月10日99刷

※底本巻末の注は省略しました。ただし、第一夜「梵天王《ぼんてんおう》」、第五夜「堡塁《ほうるい》」、第三十夜「桝《たるき》」の三語のルビは巻末注より本文に追加しました。

入力…sogo

校正…諸富千英子

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 絵のない絵本

## BILLEDBOG UDEN BILLEDER

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 絵のない絵本

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>